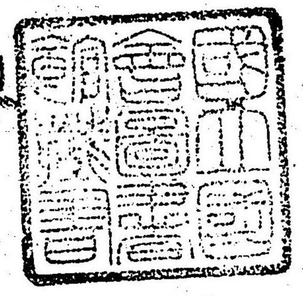
斗D-28

中西牛郎著

支那文明史論

東京 博文館藏板

222.004
N465A



31917

緒言

予〻多年支那文明史を著作するの志を懷きて未だ其閑暇を得ず近頃少く閑暇あり乃ち筆を執りて本論を草す題して支那文明史論と云ふ蓋し支那史の骨髄を拔きて之を示したるものに過ぎざるのみ故に其文字〻精詳ならず其引例〻該博ならず然れども支那歷代文化の脈絡を尋ねて七十五萬方里の版圖と四億萬の生靈とを有する此一大帝國の前途命運を豫測するに至りては聊か世の支那歷史及支那時事を論するもの

に異なる所あるを確信す其批判に至りては乞ふ之を
讀者に任ぜん

明治二十九年十一月

著者識

支那文明史論目次

第一章　發端……一
第二章　漢族文化の最大原因……十六
第三章　社會の基礎たる家族……三十四
第四章　政權及法制……四十七
第五章　哲學及文學……七十三
第六章　孔子及儒教……百三
第七章　漢族文化の發達に對する有形上の敵……百二十三
第八章　漢族文化の發達に對する無形上の敵……百四十
第九章　支那帝國の將來……百五十九

第十章　現時我邦に於ける漢文學講究法を變すへし……百九十一

支那文明史論

中西牛郎著

第一章　發端

亞細亞大陸の東端に一大帝國あり。支那と曰ふ。其版圖は東西千三百餘里。南北八百餘里。面積七十二萬方里。人口四億萬。支那本部。滿州。蒙古。伊犂。西藏打して一團となし。以て此大帝國を組織す。古代羅馬帝國は版圖歐亞の三大陸に跨りたりと稱するも。固より今日の支那帝國に及ばす。北米合衆國版圖の幅員は殆ど支那と相伯仲するも。人口に至りては其六分の一に及はす。唯た露國の版圖は稍〻支那に過くと雖も。土地の富と人口の衆とに至りて

は。支那帝國に及ばざること遠し。故に若し此帝國を分割して佛蘭西の如き小國を建つる時は。今日の支那帝國内に十二個の佛蘭西國を造り出すことを得へし。是れ豈に支那は世界の最大帝國にあらずや。

支那は過去に於て大なりし。現今に於て亦た大なり。將來に於ても必ず大ならん。而して徒に支那の大を語るは迂套に似たるの嫌なきにあらずと雖とも。吾人は此の今日米國の識見ある一人士の言を假りて。聊か讀者に告る所あらんとす。

歐洲ノ皮相的觀察者ハ此大國民ヲ指シテ。矮陋無氣力。而カモ庸俗ナル人民ナリ。其髮ヲ豚尾ニシ。鼷鼠ヲ食シ。鴉片ヲ吸フ人民ナリト。輕蔑スト雖ドモ。苟モ少シク智慮アルモノハ。誰レカ支那國民ヲ以テ。人類史上ノ驚クヘキ二大現象ナリトセサルモ

ノアランヤ。若シ支那ヲ以テ之カ比較トセンカ。彼ノ三角塔スヒンクスノ邦土ト雖ドモ。之ニ對シテ顏色ナカラン。然レドモ支那ノ淵源ガ。秘密ノ雲霧ニ包マレテ眞相ヲ示ササルハ。埃及ヨリモ一層更ニ甚キモノアリ。

支那ヲ研究スル者カ先ツ驚カサルヲ得サルモノハ。其研究スヘキ局面ノ廣大ナルコト是レナリ。蓋シ其疆域ノ廣ハ北米合衆國ト伯仲ノ間ニ在リテ。其海岸延長線ハ凡ソ三千五百英里。其黃河長江ノ二大河ニヨリテ自然ニ區分セラレタル三帶ノ地ハ。之レカ延長ヲ接合シテ一線トナストキハ。凡六千英里アリ。其人口ニ至リテハ合衆國ニ十二倍ス。ウヰルリヤム博士ハ其著書中國統論ニ記シテ曰ク。支那人ハ萬事誇大ヲ好ムノ風アリテ。自國人口ノ數ノ如キ其外國人ニ對シテ語ル所ハ決シテ

實數ニアラサルモ。百人ニ附テ二十五人乃至三十人ヲ掛値ト見ハ蓋シ大差ナカラント。博士又曰ク支那帝國ノ人口ハ概シテ一方英里ニ二百六十八人ノ割合ナレモ。東部地方ニ至レハ一方英里四百五十八人ノ割合ナリト。夫レ歐洲列國ニアリテ人口最モ稠密ナルノ邦土ハ英國ニ若クハナシ。然レトモ英國ノ人口猶ホ一方英里ニ百八十九人ノ割合ニ過サルナリ。而シテ支那ノ人口斯ノ如シ。是レ豈ニ支那ハ世界第一ノ人口稠密ナル邦土ニアラストセンヤ。支那ノ諸都會ハ其廣大ナルノ點ニ於テ。世界ノ大都會ニ讓ラサルモノ頗ル多シ。先ツ北京ノ周圍ハ凡ソ廿英里。城壁ノ高サハ五十英尺ニシテ。其濶サ又之ト相稱ヘリ。支那ノフロレンストモ稱ス可キ南京ハ。廿一英里ノ城壁ヲ以テ環ラサレタリ。サミユル、ヂヨンソン曰ク。南京ハ曾テ

六大王國カ或ハ興リ或ハ廢シタルノ故址ニシテ。古來文明ノ殘物ヲ以テ累々埋積セラレタリト。彼レ支那ニ就キ誇大ノ談ヲナシタルノ故ヲ以テ。ベネチヤ商人ヨリ億萬先生ノ綽號ヲ受ケタル十三世紀ノ旅行者マルコ、ポロハ Handchau (杭州カ)ノ事ヲ記シテ曰ク。康莊ナル道路夥多ナル橋梁。壯麗ナル街衢。巍峨タル宮殿。是レ誠ニ天國ノ城市ナリ。是レ世界都會ノ最モ廣大ナル最モ美麗ナルモノト。而シテ今日ト雖モ四方ヲ環ラスニ城樓ヲ以テシ。其崇キモノ雲ニ聳ヘ日ニ耀クヲ以テ之ヲ見ル時ハ天國ト稱ス可ラサルニ非ス。香港ハ今日世界萬國ノ輻輳スル所。ヴイクトリヤ街ノ一處ノミテモ二十萬ノ居民アリ。廣東ハ南方支那ノ最モ繁華ナル都會ニシテ。隔年試驗ヲ行フ毎ニ二萬ノ學生四方ヨリ雲集スルノ大學院アリ。此ニ製造セ

ラレタル絹紙木綿煙火ハ世界ニ輸出セリ。ウキルリヤム博士ノ言ニ據レハ。五萬ノ織工。繡工。四千ノ靴工ハ此ニ在リテ業ヲ營メリト云ヘリ。十七世紀ノ頃佛國ノ旅行者。支那ヨリ歸リテ曰ク。支那ニ於テハ巴里ト頡頏スヘキ都市ハ少カラス。里昂ト匹適スヘキ都市ハ八十アリ。之レヨリ小ナルノ都市ニ至リテハ。其數凡ソ千アリト。

支那年代ノ悠遠ナルヲ見ルキハ。吾輩ハ更ニ一層ノ驚歎ヲ起サヽルヲ得サルナリ。蓋シ支那ノ歴史ハ少クトモ四千年以上ニ溯ルコトヲ得ヘシ。若シ夫レ他國ニアリテ四千年以前ノ歴史ハ大抵想像ヲ以テ組ミ立テラレタルモノニ過キスト雖モ。獨リ支那ノ歴史ハ確實ナル年來ト事實トヲ以テ充サレタルノ歴史ナリ。支那ハ悠遠ヲ以テ人類世界ノ摸範ヲ示メスモノ

支那人民の特性

ナリ。ゼームス、ブリーマン、グラークハ曰ク。希臘國民カトロイノ戰爭ハ神代小說ニ外ナラサルモ。此時支那ノ國家ハ既ニ成立シテ。其事實ハ今日ニ傳ヘラレタリ。ホイツニー教授ハ曰ク。希臘カ神代以前千年ノ古ニ於テ。支那ハ既ニ統一セラレタルノ國家ヲ組織シタリト。

然リ而シテ此版圖ノ廣大ナルヤ。人口ノ夥多ナルヤ。年代ノ悠遠ナルヤ。蓋シ怪ムヘキニアラス。其然ル所以ノ理由ハ彰々トシテ明白ナリ。是レ卽チ支那人民カ勤敏質素勞力ノ効果ニアラスシテ何ソ。夫レ支那ニハ哲學ナシ。詩ナシ。唯々勞力アリ。是レ卽チ支那人民ノ特性ナリ。上帝ハ勤苦ノ天啓ヲ以テ支那人ニ與ヘタリ。支那人民ノ福音ハ勞力ナリ。ヂョンソン曰ク。天國ノ門ニハ大書シテ曰ク。其解シ得タル所ノ秘義如何ヲ問ハス。

唯タ其成シ得タル實事如何ヲ視ルノミト。實ニ然リ。支那ノ長城ハ地球ノ表面ヲ一見シタルモノカ誰レシモ先ツ驚歎スル所ニシテ。實ニ此一大工事ハ紀元前二百年ニ竣工シタリ。即チ其長サハ千二百五十英里ニシテ我合衆國ボストンヨリシカゴニ至ル迄ノ距離ヨリモ猶ホ遠シ。其高サハ二十英尺乃至二十五英尺ニシテ巨石ト煉瓦トヲ以テ築キ立テラレテ。六馬壁上ヲ並馳スルヲ得ヘシ。然ルニ此長城ノ建築ヨリ更ニ二千年ノ古ニ溯リテ。支那ノ泥工ニ巧ミナルハ。今日歐洲ノ旅行者ヲシテ驚歎セシムルモノアリ。ウイリヤム、セウワード曰ク。若シ長城ノ巨石ト煉瓦トヲ取リテ。六英尺廣。二英尺濶ノ壁ヲ作リタランニハ。此地球ヲ二重環繞スルヲ得ヘシト。而シテ此宏大ナル建築ハ依然トシテ今日ニ至レリ。支那ハ又道路ト運河ト

ヲ以テ縱横交貫セラレ。其大河ノ如キハ殆ント河源ニ至ル迄駛航セラル可キナリ。支那運河最大ナルモノハ。其長サ六百五十英里。壁岸厚サ百英尺。或ハ地上ニ上ルノ高サ二十英尺。或ハ巖石ヲ穿ツノ深サ七十英尺。是レ亦タ世界溝渠ノ最大ナルモノハ亦支那ニアルニ非スヤ。(ゼンキン氏孔夫子論)

抑モ吾人カ最モ驚ク所ノ者ハ。今日黃龍旗下ニ集リテ支那帝國ヲ組織スル四億ノ人口ハ。漢人。滿州人。蒙古人。西藏人ニシテ其三億七千萬ハ漢族ナルコト是レナリ。顧フニ今ヲ去ル四千年前。漢族カ黃河東北一帶ノ地ヨリ起リ漸次星霜ヲ經過スルト共ニ四方ニ繁衍シ。秦漢ノ世ニハ既ニ全ク中國ノ全面。即チ今日ノ支那支那本部ヲ以テ居家トナシ。今日ニ至リテハ人口四百餘州ニ充溢シテ。其滿州。蒙古伊犂。西藏ノ地ニ流出スルモノ一千餘萬ノ夥キ

に達し。更に進て帝國の境を越へ。或は北方黑龍江の左岸たる露國領内に侵入し。或は南の方安南。交趾。東蒲塞。暹羅。緬甸。馬來半島に進入し、更に大平洋を踰へて布哇。合衆國。加拿陀。秘露。伯拉に侵入し南洋を踰へて呂宋。爪哇。浮泥及ひ濠洲に侵入するもの亦た三四百萬に下らす。資力なきものは孜々勵精。勞力を以て他の國民を壓倒凌駕せされは止ます。資力ある者は數十百萬の資本を擁し。歐米の富商大賈と商戰場裡に輸贏を爭ふて相下らす。漢族か種族擴展の勢に富むこと斯の如し。然らは世の識者か來二十世紀世界の三大勢は露。米。清ならんと豫想するも亦決して河漢の言に非す。

今や此漢族は愛親覺羅氏を戴きて皇帝となし。恭順忠義なる臣民となり。滿州の征服者に對しては宛も奴隷たるか如きの外觀

なきにあらすと雖も。僅に一千萬の少數なる滿州人に對するに三億七千萬の多數なる漢族を以てし。而かも智力富力の點に於ては。征服者たる滿州人よりも被征服者たる漢人の方が遙に優等なりさる時は。今日政治の實權も漸く移りて漢族の手に歸する亦怪むに足らす。若し今日の支那帝國より漢族を除き去りたらんには。餘す所の人口は今日三十七分の一に過きすして。茫々たる邦土朝鮮。安南と同一の命に陷らんのみ。然らは今日支那帝國を維持するの中心力たるものは。治者たる滿州人にあらすして被治者たるの漢族にあること又何そ疑を容れん。

然らは今日の清朝か。其昔長白山の麓より起り。八旗の威向ふ所前なく。諸部を糾合し。四鄰を征服し。朱明の衰亂に乘して中國に入り。流賊を掃蕩し。四百餘州を擧て我臣妾としたるに引き易て。

康熙。乾隆の際內は三藩の亂を平け。外は伊犁。西藏を征し。文治武功の盛前古無比なるに引き易へ漸く動搖し。人心漸く倦怠し內は綱紀の弛廢を致たし。外は列國の輕侮を招き。殊に彼の三十餘年前洪秀全か一呼風雲を喚び起し。十六省を蹂躙し。三百餘城を攻陷し。愛親覺羅氏の命運恰も一髮千鈞を挽くも啻のみならざるの觀ありしは。誠に是れ盛衰定りなく榮枯常あらず。有爲轉變の極なりと謂はさるを得す。而して清朝か三百年間に斯る有爲轉變を閱歷したるにも係はらす。漢族裡面の勢力に至りては。四千年間進むありて退くなく。盛なるありて衰ふるなし。然らは漢族か愛親覺羅氏と興廢存亡を同ふする者にあらざるや亦た明けし。

世人は徒らに支那既往の歷史を讀んで。支那の衰弱外狄の强梁

に駭くと雖も。今日清國の大勢を見れは昔時の比にあらざるなり。英佛米露の人民か今日支那の內地に侵入するものは。昔時五胡か中國に雜居したるに異ならす清國か我邦と戰ふて大に敗れ。三億萬兩の償金を出して和を乞ふたるは。昔時宋朝が土地金帛を與へて和を遼。金に乞ふたるに異ならす。其露國の援助を假りて之れに土地を與へんと密約せしと言ふものは。昔時後晉の石敬塘か幽荊十六州を割て契丹に與へたるに異ならす。而して今日支那は無限無盡の富源を有し。其茶は今日世界億萬の飲料に供し。石炭は全世界二千年燃料に供して餘あり。江河縱橫。沃野千里。苟くも器械を利用し。鐵道を布設するときは。之をして世界第一の富國たらしむるも難らさるなり。此を以て列國進取の大勢なる者は滔々八面より壓し來りて支那に集らんとす。漢族將

來の命運なるものは果して如何なるべき乎。然れとも歴代支那は外狄の爲めに征服せられて。漢族の勢力は之れが爲めに毫も衰退せず將來の漢族も亦た果して此の如くなるへき乎。抑も知らす漢族か種族繁殖の勢力。即其一大勢力の隱伏する所は果して何くにある乎。又知らす今日歐洲文明の傾向なるものは。漢族固有の文化とは果して如何なる關係を有する乎。苟くも吾人にして是れらの問題を把り來り。一一精細に之を解釋することを得たらんには。漢族將來の命運を預知するは夫れ猶ほ瞭然として火を觀るか如きものあらん。

我國の隣國にして利害の關係最も密接なる者は支那帝國にして若し將來支那にして其局面を一變するか如きあらは。縱令其變化は支那内部の革命にして國内分裂するに止まるとも。將た愛

親覺羅氏亡滅し新朝之れに代りて起るとするも。將た露英の如き强國機會に乘して清朝を分割するとするも。將た今日の清朝政府にして益々進取策を講し鐵道電線を架設し。文明の利器を採用し。工商業を發達し。政治上の革新を斷行し以て國勢を挽回するとするも。我邦皆之れか影響を被らずんばあらす。而して我邦今後の盛衰存亡は。一に支那に關係すと云ふも可ならん。然らは今日に當りて心を潛めて支那帝國の大勢を觀察し。其將來に關するの問題を討究し。以て之れに對するの準備をなすは。現今の一大急務にして識者當さに任すべき所なり。予や謭陋敢て其人あらすと雖も支那四千年間の歴史に於ては十餘年間聊か研究する所あり。此に一篇の支那文化史論を公にし。以て我國人士の支那を研究するものゝ參考に供せんと欲するなり。

第二章　漢族文化の最大原因

第十九世紀の今日に於てこそ宗教の勢力は甚だ微弱にして。僅に國家を組織する一部の機關たるに過ぎず。又人間最高の智識なりと誇稱する哲學範圍内に一科を占むるに過ぎずと雖も。古代人類が文化進歩の途程に上るの初めに於ては。社會萬般の事物皆宗教に依りて支配せられざるはなし。彼の印度。埃及。希臘の文化は悉く宗教に基きたるものにても。又以て此事實を證明するに餘りありと謂つべし。而して支那帝國の如きも亦た然りとするものなり。

然らば古代漢族の宗教思想は如何なるものなるや。此問題を解釋するときは。固より漢族文化の最大原因を知るに難からざるなり。

吾人は古代漢人の宗教思想を以て拜自然教なりと言はんとす。抑も拜自然教とは何如なる意義なるや之を説明するの前に方て先づ之が反對なる宗教思想を擧けて。以て兩者の差別を示さんとす。拜自然教の反對と言へば古代印度及び猶太の宗教思想に如くはなし。而して今日の佛教の如き或点に於ては婆羅教と異なる所あるも。其全體に至りては固より婆羅教より脱化したるものなる可く。又今日の基督教の如き或点に於ては猶太教と異なる所あるも全體に至りては固より猶太教より進歩したるものなる可し。然るに婆羅門教佛教を萬有神教なる概名の下に總括せられ。猶太教基督教は惟一神教なる概名の下に總括せられて。兩者の思想は教理に於て相容れざるにも關はらず。其拜自然教に反對するに至りては。兩者共に同一壇上に立て手を携ふ

るものなり。

蓋し印度思想を代表する婆羅敎佛敎も。猶太思想を代表する猶太敎基督敎も。共に吾人の感覺を惹起する有形世界の外に不生不滅。無始無終の靈體ありと信じ。感覺を以て接す可からざる靈體を以て眞實とし。感覺を以て接す可き有形界を以て虛假とするに至りては其異なるを見さるなり。唯だ猶太敎は之を名くるに眞神を以てし。此眞神は有形世界の成立する前に存在して其始めなく。有形界の盡滅するの後に於て其終りなしとし。印度敎は之を名くるに眞如を以てし。此眞如は有形世界の現象を離れて不生不滅なり。有形界の現象を外にして無限無極なりとするにあるのみ。此を以て兩敎の歸着する所は。人をして有形を卑みて無形を尊び虛假暫時の世を厭ふて眞實永久の世界を慕はし

むるにあり。之に反して。拜自然敎は唯だ吾人五官の感覺に觸るべき宇宙萬有が人類の生活及幸福に關する勢力を崇拜するとを吾人に敎ゆるに過ぎさるのみ。固より有形世界を離れたる靈体未來世界の存在に關するの思想あることなし。

抑も漢族社會の組織は堯舜の世にあり。堯舜の世今日を去る四千年と言へば。黃帝の世は四千二三百年以前にありしならん。然るに黃帝は涿鹿に都し。顓頊は帝丘に都し。帝嚳は亳に都し。帝堯は冀州に都すと謂へば漢族の起原は黃河の東北にあるを知る可し。或は漢族は西北より來り。黃河の流に沿ふて東の方に繁衍せりと言ふものあれとも。之れ黃帝以前にあることにして歷史の未だ記載せざる所なれば。何とも確言し難し。唯だ黃帝以後漢族の東北に蕃殖し文化の程途に上りたるば爭ふ可からさるの

事實なり。然るに彼等今日文化の最大原因たる拜自然教の如何なる順序に因りて形成せられたるかは疑問の外なれども。唐の司馬貞史記を補て

自人皇已後。有五龍氏。燧人氏。大庭氏。柏皇氏。中央氏。卷須氏。栗陸氏。驪連氏。赫胥氏。尊盧氏。渾沌氏。昊英氏。有巢氏。朱襄氏。葛天氏。陰唐氏。無懷氏。斯蓋三皇已來有天下者之號。但不紀載籍。莫知姓王年代所都之處。而韓詩以爲自古封太山禪梁甫者萬有餘家。仲尼觀之不能盡識。管子亦曰古封太山七十二家。夷吾所識蓋十有二焉

と言ふを以て之を觀れは拜自然教は漢族と共に發達したるや明かなり。今ま夫れ科學的に宇宙万有の理法を說明することは能はざる原人時代にありては。仰觀俯察する所ろのもの悉く奇異

の念を惹起せさるはなし。而して其最も大なるものは太陽なる可し。萬物其煦育の恩に因りて生長し。其光輝の德に因りて顏色を生し。有機無機一として之れが感化を受けさるはなし。之に繼ぐものは月と星辰なり。月は萬物を生長發育するの功なしと雖。夜を照し輝光太陽に次く。無數の星辰に至りては其光月よりも小なりと雖。燦然大空に滿ち人類が測量す可からさるの秘密を隱すが如し。故に未開人民が尊敬する所のものは。日月星辰に如くはなし。然れとも俯して地を察すれは山は巍々として峙ち。川は滔々として流れ。人類に與ふるの恩澤得て測る可からず。又性來變化して測る可からざるものは風雨なり寒暑なり。故に原人が崇拜する者は。上に在りては日月星辰に如くはなく。地に在りては山嶽河海に如はなし。而して山嶽河海を載するものは地なり

日月星辰を包み山嶽河海を覆ふものは天なり。故に日月星辰山嶽河海は原人が最も宗拜する所の者なるを見るべし。

抑も支那には今日吾人が用ゆる宗教Religionの意義に相當する文字を有せず。若し強て之を求めば祭祀の字是れに當る可し。然るに祭の字は元來象形會意の二義より出でたるものにして蓋し夕は肉なる可く、又は手なる可く、二は天なる可く、小は日月星辰の三光なる可し。即ち人手に肉を持して日月星辰を祭るの義なりと知る可し。而して祭の字の作は堯舜以前にあれば、此字は漢族の自然教と共に生したるものにして、漢族宗教思想の起原を知るに足れり。

然るに天地の間に靈蠢の動あり。其最も靈なるものを人類とす人類の他の動物に異なる所以のものは精神思想を具ふるを以

てなり。而して猶ほ天の包覆する所たり。故に拜自然教は天を以て有形世界を離れたるの靈体とはせざれども、又天を以て人類萬事を攝理するの意思及び勢力あるものとせり。然らば他の日月星辰山嶽河海の如きは意志及び勢力なしやと云ふに、天の如く意志及び勢力を有せざれども其神なしとせず。禮記の祭法篇に曰く。

燔柴於泰壇祭天也。瘞埋於泰折祭地也。用辭犢埋少牢於泰昭祭時也。相近於坎壇祭寒暑也。天宮祭日也。夜明祭月也。幽宗祭星也。雩宗祭水旱也。四坎壇祭四方也。山林川谷丘陵能出雲爲風雨見怪物皆曰神。有天下者祭百神。諸侯在其地則祭之。亡其地則不祭。

要するに拜自然教は天を祭り。日月星辰を祭り。山嶽河海を祭り。風雨を祭り。祖先の靈を祭るもの皆な是れ神なり。人類は死して

其形軀朽滅すと雖も。魄歸於土魂上於天とせり。然れども彼れ印度猶太二教の如く輪廻流轉し若しくは他世界に行くとはせざるなり。

抑も漢族が此の如きの宗教思想を有したることは。其歷史が證明する所にして毫も疑ふ可き所なし。唯だ此の如きの宗教思想は何如にして漢族文化の原因となりたるか。語を換へて之を言へば。拜自然教は漢族をして何如なる國民とならしめたるか。是れ吾人が將に解釋を試みんとするの一大問題なり。依て今吾人は拜自然教の性質を分析し。漢族文化の進歩に與へたるの結果如何を論すべし。

第一。拜自然教は有形世界を離れたる靈体の存在を說かず。故に未來世界の思想なし。此を以て漢族の思想は皆現世に向て發達し。學問技術の如きも有形世界を利用するの目的を以て研究せられたり。苟も人生現世に必要ならざるの事物は措て講究せられず。如何にして人類は其目的即ち形體的の快樂精神的の欲望を達することを得るか。何如にして善良なる國家を組織することを得るか。何如にして本來固有の性を發達することを得るか。此問題を踰えて攻究の歩を進めざるは。是れ未來世界の理想なり。現世を以て目的とするもの宜しく然る可き所なり。更に之を詳言すれば拜自然教の信徒は生活の外眼中一物なし。而して其生活たるや現世の生活にして未來の生活にあらず有形世界の生活にして無形世界の生活にあらず。此を以て彼等は學術上の研究をなすも唯だ物理心理上の現象を研究して之を人生の幸福を增進するの上に於て應用せんとするの外ならず之が結

果として學術は深奥宏大なる宇宙の眞理を研窮するの精神に乏しくして精微の域に達すること能はず。道德は唯だ現世の幸福を得るの方法たるに止まりて無限世界に入るの準備たること能はず。世人豈に此の如きの人種を稱して實利的の人種と云はざるを得んや。是れ拜自然教より生ずる第一の結果なり。

第二。拜自然教は天地、日月、星辰、山嶽、河海及び祖先の靈を崇拜するものにして多神教なり多神とは。一方に於て多樣の思想を包含すると同時に他の一方に於ては統一の思想を包含す。是れ彼の佛教が平等差別の說とは大に異なる所以なり。佛教の平等差別は其相を以て差別とし。其體を以て平等とするものなり。拜自然教は是に異なり多樣とは天地、日月、星辰、山嶽、河海等其他一切萬物の形狀、性質、勢力、作用を異にするを言ふなり。即ち其統一と

は天を以て之が最高位に置きて一切萬物をして統屬して其勢力作用を調和せしむるものなり。蓋し天地の間には反對の事物甚だ多し。例へば四季の春は生長し秋は肅殺するが如き。人類の男は剛にして女は柔なるが如き。形狀、性質、勢力、作用同じからず。而して天地生成の功を全ふするに至りては一致せり。恰も五聲相和し樂をなし五色相合して文をなし五倫相叙して國をなすが如し。此思想は漢族が模範を自然に則りて人事に應用するものなり。故に漢族は自然事物を綱羅して之を利用し。又後世に及んでは外國の技術を採用して自己の發達に資するは一に此思想に依らざるはなし。例へば佛教基督教の如き漢族固有の思想に反對するを以て之を拒絕すべきは勿論なり。然るに佛陀は西方の聖人なり。耶蘇も又西方の聖人なり。其教を設くる各々其地

に從つて宜しきを異にすと言ふて之を棄てざるが如きは是れ亦拜自然教の精神より出づるものにあらずとせんや。

第三拜自然教の尤も勢力ある思想として漢族の政治上に影響を及ぼしたるものは天是なり。夫れ天は上に言へるが如く多神教の思想は獨り多樣を統一するに止まらず。又階級を秩序立るの思想あり。卽ち其祭祀の如きは天を以て最尊とし。地之に次き。日月星辰之に次き。上下の尊卑區別を爲す極めて精に。階級を立ること極めて嚴なり。卽ち漢族が禮の起源は此秩序の思想を人類社會の方面に向て發達せしめたるに外ならざるなり。

自然の現象及び人事の現象を攝理するものにして之より勢力あるものはなし。何となれば山嶽、河海の神の如きは唯だ其地を鎭するの勢力ありて其他に及ばず。祖先の靈の如きは唯だ其子

孫を禍福するの勢ありて其他に及ばず。而して拜自然教の信徒は自身以外に他の勢力を認めざるを以て若し天なかりせば必ずや大は小を凌ぎ强は弱を暴するに至らざるを得ず。而して國家の建設豈に永く之に强固することを得んや。印度の婆羅教の如きは宗教に托して一國人民を婆羅門、刹帝利、吠奢、戍陀羅の四種性に分ち。婆羅門刹帝利のみ獨り一國を統治するの權を有せり又中世歐洲の天主教は帝王神權の說を立てゝ國家の主權を維持したり。然らば支那は如何にして社會を統理することを得るやと言ふに。蓋し亦天を以て國家權力の源とせり。唐、虞、夏、殷、の王者皆其位を以て天職とせざるはなし。然れども國家主權を以て天職とすれば苟くも天意に逆ひ天職に任へざるものは其位にあるを得ず。又其位にあるものにして天意に逆ふものは之を

討伐するも可なり。是れ堯、舜、湯、武の禪讓、放伐由て行はれたる所以なり。抑も世界萬國保守の氣風最も盛にして帝王の威權最も尊嚴宏大なるは支那帝國に如くはなし。此の如きの國體にして禪讓、放伐古より行はれ。歐洲民族が米國の獨立、佛國の革命に至りて始めて見るを得たるの如き。革命主義が三千年前より既に公認せらるゝに至りては何如にも驚く可きが如し。而して何ぞ知らん保守の氣風と革命の主義は元と是れ同一の拜自然教より出でゝ相悖らざるものなることを。請ふ今進んで保守の氣風を論せん。

第四漢族が保守の氣風に富めることは。其特性の最大なるものとせざる可からず。試に唐虞より今日に至るまで支那帝國數年間の歷史を一讀せよ。制度。文物。風俗。習慣依然として變せざるも

の漢族に非ずや。又今日南洋諸島濠洲。米洲に移住する數百万の漢族を見よ。何如なる文明の國にありと雖も其固有の風俗、習慣は毫も之を改めざるに非ずや。抑も此の如き漢族が保守に富むの氣風は何に因由するやと言ふに。是れ亦拜自然教の結果ならずんばあらず。蓋し拜自然教が保守の氣風を養成するに二因あり。一は家族を以て國家の單元とし。一家の族長を以て天に比し。族長の命令と言へば如何なることも敢て之に背かざること。一は人死すれば其形体は朽腐するも其靈魂は滅せずとすること是れなり。此二因を特に名けて祖先教とす。即ち此祖先教は一切保守の氣風を養成するものにして。若し漢族より保守の風を去らんと欲せば先づ此祖先教を除かざる可からず。此祖先教にして存する以上は漢族保守の氣風は不朽不滅の勢力なるものな

り。

之を要するに拜自然教の中には多神教、祖先教の二教を包含するなり。而して漢族が此宗教思想の爲めに養成せられたること二千年。漢代に及んで佛教始めて印度より來り之を破壞せんと試みたるも終に其功を奏すること能はざりし。又北方なる北方種族は腕力を以て之を破壞せんと試みたるも是れ亦其効を奏することは能はざりし。故に拜自然教は其信徒をして勞力の國民たらしめ、又統一强國なる國家を建設せしめ、家族の基礎を强固ならしむ。其結果は卽ち人口の繁殖、富の增殖、有形事物の進歩に外ならず。此れ支那帝國が今日四億万の人口を有したる所以なり。

故に予は拜自然教が漢族文化の最大原因たるを發明し。其拜自然

教中に包含する所の要素を以て漢族各般の進歩。卽ち其社會の諸現象を說明して以て漢族文化の發達を叙せんと欲す。顧ふに支那には古來歷代の歷史ありて今古を一貫するの歷史なし。偶々是れあるも唯だ政治上の歷朝興敗の歷史にして漢族發達の歷史にあらず。又近時に及んでは西洋文明歷史の體制に倣ふて博く文明一般の現象を綱羅するものなきにあらずと雖も、一主義を以て之を貫くものなし。獨り予が攻究せんとする本論に於ては拜自然教を以て漢族文化の最大原因となし。是れによりて以て一切の現象を說明せんと欲するなり。

第三章　社會の基礎たる家族

支那帝國は堯舜より今日に至るまで四千年の悠久なる時間を經過し幾十回の革命を閲したるを知らず彼れ長江の濱に在る金陵すら六朝の興廢を歴たりと云ふに非すや況んや黄河の畔に在る洛陽長安に至りては故趾廢墟累々として今猶行人をして千古無限の感慨を催さしむるに非ずや而も此歴代の革命なるものは獨り國内より起りたる者にあらず彼の金元二朝及現今の愛親覺羅氏の如きは遠く塞外或は漢北より來りて馬蹄烟塵の間に支那帝國を蹂躙したるに非すや然るに獨り驚く可きは此滔々たる歴代革命の中に立て漢族の文物制度風俗習慣は依然として變せさること是れなり今日の清朝人民と三百年前の明朝人民とは同一の人民なり明朝人民と元朝人民とは同一の人民なり又元朝人民と宋朝人民とは同一の人民なり而して五代而して唐而して隋而して南北朝而して晉魏漢秦朝廷こそ異なれ人民の風俗習慣思想感情に至りては殆と變ずることなし是れ豈に驚くべき保守に富みたるの國民にあらずや然り而して此保守の勢力は何處に存するやと云ふに蓋し社會に存するなり彼れ國家に幾回革命を歴るも社會に至ては一回も顚覆せられたることなし而して社會の基礎強固にして顚覆せられさりしものは蓋し家族にあり而して家族の制度強固にして革命之を動かすこと能はず政權之を變ずる能はさる所以の者は蓋し又漢族の祖先教にあるなり

抑も祖先教か拜自然教の一要素たること上章既に之を略説したりしが又之を詳論すれば祖先教なる者に二個の道理に依り

祖先教の成立
保守主義の勢力

て成立する者なり。即ち第一は、漢族が、家族を以て小天地とし、親長を以て天として之を尊敬すること。二は人死すれば肉体は朽壊するも魂は天に上り、魄は地に止り。煮蒿悽愴、其靈永く存するを以て之を祭祀すること、是れなり。此の二者は實に漢族祖先教の因て起る所にして。漢族が世界萬國に卓越したる驚く可き保守主義の勢力も即ち此に存するなり。

今日漢族が海外各地に出稼し。勞力を以て金を貯へ。一人毎に各數百圓乃至數千圓を携へて本國に歸鄉する者は毎年數千人にして。其金の清國に入る者は二千万圓に下らざるなり。是れ果して何如なる理由を以て之を說明するとを得るか。豈に又た祖先教の勢力に非さるを得んや。夫れ祖先教は父母の靈を以て永く存するものとす。故に漢族が古來より其鄉國を去ることを憚る

所以の者は豈に父母墳墓の地を去らざるを得さるを以てするに非ずや。今や人口の增殖より生する必要の勢に逼まられて鄉國の外に出稼せざる可からざるに至りしも。之れが爲めに永く墳墓の地を離るゝは其欲せさる所なり。故に海外の地。風光の美人生の樂ありと雖も其靈底既に貯蓄を生すれば祖先墳墓の地に歸り來るに非ずや。

夫れ、人民、尤も、保、守、の、氣、風、に、富、む、者、は、其、鄉、國、に、有、て、他、に、移、らさる者より甚しきはなし。幼年より成人に至るまで感化印象を受く る者獨り其身邊を圍繞する鄉國のみにして。耳、目、心、志他に移らさるときは其鄉國の風俗習慣を保存して失はさるものなり。若し夫れ天性保守の氣風に富む人なりと雖。朝暮に是れ住所を變して一定せすんば。其子孫に至りては終に他鄉の風俗習慣に感

化せられて。自鄉の風俗習慣を失ふを免れたるなり。故に風俗習慣を保存するの勢力は人民をして世々代々其祖先の地を去らしめさるより大なるはなし。而して祖先墳墓の地を去るは古來漢族か最も重する所なりし。漢族か之れに由りて保守に富むの氣風を養成せられたるも又宜ならすや。

然るに祖先敎か漢族に保守の氣風を養成したる者は。獨り其祖先墳墓地を去るを重せしむるのみにあらさるなり。夫れ事死如事生とは漢族祖先敎の骨髓にして。孔子三年不改父之道トハ萬世不磨の金言となれり。故に支那人民は冠婚葬祭等凡そ一家の大事ある毎には必す祖先の廟に至り其靈に告げさるはなし。故に支那の家族に於て一家の憲法たるものは其祖先の意志なり。如此き祖先の意志を重するの人民にして古風舊俗を改むるを

欲せさる固より怪むに足らさるなり。

然り而して祖先敎か更に進んて漢族保守の氣風に第三の影響を與へたる所以の者は家族の結合是れなり。今夫數人の兄弟ありて其父母を尊ひ父母死すれは其靈を祭るとせんに此兄弟各々數人の子あれば亦皆祖父母を尊ふ可し。此の如くなれば數人の孫。分家して數家族となるも其祖先とする所は同一なる可し。祖先とする所既に同一なりとすれば兄弟の子は從兄弟となり愈々遠くして愈々疏なるも其祖先を同一にする間は家族たるの親を失はさる可し。而して此數家族若はく數十家族にして皆祖先墳墓の地を去ることを欲せすして。同一の鄉里同一の村落に住居したりと假定せよ。必すや宗黨の親ありて患難相救ひ吉凶相弔し。同心戮力して祖先の遺風を維持す可し。是れ即ち漢族

家族の結合依て強固なる所以なり。

故に支那に於ては歴代革命の亂ある毎に王孫落魄哀を路人に乞ひ。城闕廢頽悲を後人に遺すの慘態あるにも係らず。地方の豪族に至りては却て數百千年の久き。祖先墳墓の地に住し祖先の遺業を守り祖先の風俗習慣を維持して失はざるなり。其家族の最大なる者に至ては儼然として諸侯の如く。太平無事の日には力を勵まし業を勤めて衣食の富裕を計り。且つ有事の日又は其族長たるもの族人を率ひ兵器を執て其鄕里を保護するの例は古より少なからす故に賊軍官吏を見れば之を侮ると雖も。地方豪族の勢力强大なる者に遇ふては。憚て之を避るの例も亦少なからさるなり。

史記太史公ノ自序ニ曰ク。昔在顓頊命南正重以司天。北正黎以司地。唐虞之際。紹重黎之後。使復典之。至于夏商。故重黎氏世序天地。其在周程伯休甫其後也。當周宣王時。失其守而爲司馬氏。司馬氏世典周史。惠襄之間。司馬氏去周適晉。晉中軍隨會奔秦。而司馬氏入少梁。自司馬氏去周適晉。分散或在衛或在趙。或在秦。其在衛者相中山。在趙者以傳劒論顯。蒯聵其後也。在秦者名錯。與張儀爭論。於是惠王使錯將伐蜀。遂拔因而守之。錯孫靳事武安君白起。而少梁更名曰夏陽。靳與武安君坑長平軍。還而與之俱賜死杜郵。葬於華池。靳孫昌。昌爲秦主鐵官。當始皇之時。蒯聵玄孫卯爲武信君將。

是れ司馬遷自ら其家系を叙するものなるか、故に詳密なること此の如し。然れども是れ豈に獨り司馬遷のみならんや。若し今日の支那人をして其家系を語らしめたらんには。其詳密なること

亦皆此の如き者あらん。

吾邦の如きも源平より足利時代に至る迄は。地方に豪族あり數家族相合して宗黨を成す支那に異ならず。是れ獨り源氏、平氏の如き大族にのみ止まるに非ず。例へは源、平の時に在りては和田、の一族數十人。建武中興の時に在りては楠氏の一族數人と言ふ如く是れなり。是れ豈に獨り和田氏、楠氏のみならんや。海内地方の武族大抵此の如くならさるはなし。而して足利氏の末海宇の大勢一變して故家舊族其跡を絶つに至れり。

要するに家族の結合は祖先の風俗、習慣を維持するに最も與つて力ある者にして。漢族か保守の氣風に富むものは全く此に在り。然るに此祖先敎は漢族家族の結合を强固にするに止まらす。更に進て漢族の繁殖を助くるの一大原因となる者なり。夫れ祖

先敎の骨髓は前に論するか如く祖先の祭祀を絶さるに在り。祖先の祭祀を絶ざらしめんと欲せは家族の繼續を重せさる可からす。家族の繼續を重すれは繼嗣を重せさる可らす。故に支那に於ては不孝之罪三千無後爲大と言へり。又妻を去るに七去の道あり而して子なきを以て其一とせり。是れ豈に繼嗣を重する所以よあらすや。古より支那に一夫多妻の俗ありて之を改めさる者繼嗣を重するに出るなり。試に思へ此繼嗣を重するの俗は漢族の增殖を助くるに於て果して何如の勢力を有したるヲ。今や漢族か三億七千万の夥しきに達し支那四百餘州に充溢し滿州、蒙古、伊犂、西藏まて漢族の移住者を見る所以のものは。豈に此繼嗣を重するの俗を以て之れか一大原因とするに非すや。而して其源は卽ち祖先敎に外ならさるなり。近時歐洲の一學者か世界の

永久強固なる家の形成

將來を豫想して。歐羅巴は數百千年の後必ず支那人民の一種奇異なる家族の組織に依りて壓倒せらるゝならんと預言したるものは。其意豈に此にあるにあらすや。

抑も永久强固なる國家を形成せんと欲せば。(第一)土地と人民との結合を密着にせさる可らず。(第二)人民と人民との結合を密着にせさる可らず。(第三)其人民の勢力を外に向て擴展せさる可らす今日歐洲列國は將に此三者を以て建國政策の主眼とするにあらすや。卽ち土地と人民との結合を密着せしむるの方法は他にあらす人民をして其本國を愛せしむること是れなり。今ま夫れ赤貧にして財產なきの人民は其國を見ること旅舍の如し。之に反し土地財產を有する者は自ら其國を愛するの心甚た厚し。是れ人情の免れさる所なり。故に歐洲の政治家が貧民を富ます

に汲々たる所以のものは獨り其幸福を增進せしめんが爲めにあらすや。彼等をして財產を有し之に依て其本國に對し責任を重からしめ以て忠君愛國の人民たらしめんが爲めなり。

若し夫れ人民と人民とを結合するに至りては更に一層熱心する者の如し。卽ち歐洲列國が國民の敎育に於て國語を重し又宗敎の如きも信敎自由を主張するに關はらす。尙ほ直接に間接に一國の多數が信奉する宗派を保護し一國人民をして務て同一の宗派を信奉せしめ。以て人心の分離を防き。或は風俗習慣の極めて瑣細なる物に至るまで。外國を排斥して自國を尊尙する者は豈に人民と人民とを結合せんが爲めにあらずや。而して其人民の勢力を外に向て擴展するに至りては列國今日の對外方針殆と一徹に出つるが如し。英國が數十百年來殖民政畧を取て英

國人種を米洲に濠洲に擴展したる論するを俟たず。近日に至りて佛國が安南に鉅額なる經費を抛つて殖民を奬勵しつゝあるは人民の勢力を外に向て擴展するものゝあらずして何ぞや。然り而して漢族は獨り政府の保護奬勵を待たず。祖先敎の勢力に依りて父母の墳墓を重んじ。土地と人民との結合を密着すること彼が如き者あり。政府は敢て國民を結合するの政畧を取るにあらざるも人民が其家族に於て結合するの强固なる彼が如き者あり。又政府は殖民を奬勵せざるも人民自ら海外に移住し。苟も利益のある所は千山萬水を排して之に赴き。市街を築き村落を成すこと彼か如き者なり。是れ豈に第十九世紀歐洲列國の政治家か國家政畧の新方針として孜々經營する所の者を。支那人民は國家の保護奬勵を待たずして。既に千年以前より實行しつゝあるに非ずや去れば世の識者か第二十世紀の勢力は露米清ならんと預察するも亦た其理由あるとに非ずや。

第四章　政權及法制

拜自然敎か漢族の政治上に其影響を及ぼす所のものは天の攝理是れなり。而して其影響たるや天の威命を以て政治上主權の源とすると天か攝理する自然界の秩序に則りて法制を立つるとの二種あり。前者は革命にして後者は制作なり。即ち周に於て武王は革命者を代表し周公は制作者を代表したる者なり。漢族か政治上の主權者を以て天の代理者となし。大に其位を尊

敬すると同時に其職を以て天職となし。天職を奉せさる者は其位を去て之を他に讓らさる可らすとするの思想は。全く拜自然教に於て天は自然界人事界を攝理するとの思想より出でゝ。堯、舜、禹の禪讓は此に出てたること疑を容れす。若し夫れ帝、堯、陶、唐氏の冀州平陽に都せし時には其境域も稍々廣く其人民も稍々多く。數十の諸侯之を仰戴したるを以て之を見れば。漢族か統一して帝國を建設したるの端緒を求めんと欲せは。固より帝堯以前に溯らさるを得さるなり。

伏羲氏始めて八卦を畫し。書契を作り。嫁娶を制し。網罟を結ひ。犧特を養ひ。琴瑟を作り。神農氏始て耒耜を作り耕稼を敎へ。百草を嘗め。醫藥を製し。交易を敎へ。黃帝始て器用を作り。貨幣を作り。舟車を作り。衣冠を制し。城邑を營み。文字を制し。曆日を作り。養蠶を

敎ゆと云へば。漢族生活の機關。社會の組織は既に此三氏の時に始りたりと謂つ可し。然して所謂伏羲神農なるものは。彼の巢を造りて之に住する時代の人民を稱して有巢氏と云ひ。木を鑽り火を取りて火食する時代の人民を稱して燧人氏と云ふたるの類にあらさるか。然らは伏羲神農は時代に名けたるものにして個人に名けたるものにあらさるなり。然り而して社會か此の如く段階を踏て進歩したるか如く。政治上の統一も亦た漸を以て成るものなるや明かなり。蓋し彼黃河の東北に住居したるの漢族は。其始め幾百幾千の部族に分れたるや知る可からす。而して此幾百幾千の部族は或は數家族を以て一部落とする者あらん。或は其大なる者は數十家族を以て一部落とする者あらん。而して此に此の部落の酋長なる者は卽ち族長に外ならさるなり。

黄帝の時既に萬國の諸侯ありと言ふものは。卽ち是れ部族の酋長にして。其所謂邦國なる者は數家族若くは數十家族の團結に過きさる可し。諸侯の名あるを以て之を春秋十二諸侯と同視するが如きは。尤も事實を誤りたるの謬見なりと言はさるを得す。抑も人類はアリストートルか言ふ如く人類は政治的動物たること疑ひ無し。人類か往古其生活上の必要に依りて分業法を始め。交易を始め。又猛獸毒物の禍害を防かんか爲めに結合したる。卽ち是れ社會組織の始めにして。此社會の組織と共に國家建設の必要も始まるなり。然れとも徒に必要あるのみにては未た部族の統一をして以て國家の建設をなすに足らさるなり。近世歐洲の學者か國家の起源を解釋するや。ホッブス、ルーソーの如きは民約說を主張して。國家の起源は太古人民が各人の私權を捨

て、之を一人に委托して公權をなしたるに始まると言へる。是純然たる權利說を以て國家の起源を解釋せんとするものなり。何如せん事實は此理論と並立するを許さすして權利建國說は世に斥けらるゝに至れり。又他の一派は國家の起源は强者か元來腕力を以て弱者を征服したるに始まると主張し。前者に比すれは頗る事實に近きか如しと雖も。獨り腕力のみを以て國家の起源とするは不完全の解釋たるを免れす。何となれは强者若し單に腕力にのみ依賴して弱者を征服し强者の權を以て主權とするときは。卽ち是れ國家の主權は强者と共に變轉極りなき者にして。永久强國なる國家の建設は望むへけんや。

然りと雖も。歐洲建國の歷史は姑く之を不問に付し。漢族國家建設の歷史に至りては吾人斷して之を宗教思想に歸せんとする

なり。卽ち黃帝以前各部族が統一して國家を建設したるは。皆天の思想を以て之が起源となしたるや明白なり。蓋し彼の山、川、河、嶽の神の如きは唯た依て以て一地方の人民を影響するの勢力とす可くして各地方の萬民を統一するの勢力とするに足らず。且つ山、川、海、嶽は物質にして其神も亦物質的の勢力を有するに過ぎず。物質的の勢力を以て國家主權の原動力とはなす可からざるなり。然らは祖先の勢力なるか祖先の靈は唯た其子孫たる一家族を結合するの勢力あるも。其祖先を異にする各部族を統一するの勢力とするに足らず。而して漢族は政敎一致を主張するの人なるにも係らず。家族は親愛を以て支配せられ國家は正義を以て支配せらるゝの區別は之を認めたり。或人孟軻に舜天子となりて瞽瞍人を殺さは之を何如と問ひしに。孟軻荅へて舜

は竊かに其父瞽瞍を携へて海濱に逃れんのみと言ひしか如きは。以て家族と國家との性質を異にするを見るに足らざるか。然らば漢族が統一して國家を建設したるは天に出てたりとするや論を俟たず。堯舜の禪讓。湯武の放伐皆天の思想より出てたり。孟軻堯舜の禪讓湯武の放伐を論して曰く。

萬章曰堯以天下與舜有諸。孟子曰否天子不能以天下與人。然則舜有天下也。孰與之。曰天與之。天與之者。諄々然命之乎。曰否。天不言。以行與事示之而已矣。曰以行與事示之者。如之何。曰天子能薦人於天。不能使天與之。天下諸侯。能薦人於天子。不能使天子與之諸侯。大夫能薦人於諸侯。不能使諸侯與之大夫。昔者堯薦之於天而天受之。暴之於民而民受之。故曰天不言。以行與事示之而已矣。曰敢問薦之於天而天受之。暴之於民而民受之。如何。曰使之主祭

而百神享之是天受之使之主事而事治百姓安之是民受之也天與之人與之故曰天子不能以天下與人

齊宣王問曰湯放桀武王伐紂有諸孟子對曰於傳有之曰臣弑其君可乎曰賊仁者謂之賊賊義者謂之殘殘賊之人謂之一夫聞誅一夫紂矣未聞弑君也

と孟軻此の論は自己獨制の意見を吐露したりとして見るべきに非ず漢族本來政治上の思想此の如くなりしなり

然るに堯舜禹の三人は互に禪讓せしか禹の洪水を治るの功業は天下を蓋ひ万世に垂るゝに足り其子啓亦た賢明なりしを以て夏后氏は人心の歸服する所となりて遂に永久一統の朝を開くことを得たり然れとも啓諸侯有扈氏を討する辭に曰く有扈氏威侮五行怠棄三正天用勦絶其命今予惟恭行天之罰又仲康義

和を討するの辭に曰く今予以爾有衆奉將天罰是れ皆な君を以て臣を討するの辭なり而して皆な天罰を行ふと云ふ即ち王權を以て天權としたるを見るへきに非すや是より已來夏殷二代明君賢相互に相警誡するや皆な天命を畏れ天威を敬するを以せすんばあらす而して人民も亦た王者を以て天の代理者とし て之を尊敬し其命を遵守したり然るに夏桀殷紂の如き慕虐の君出て其の民を壓するに及んては人民皆な其天位に居り天職を奉する所以に非さるを知れり此に於て殷湯周武興り代天吊民の大義を鳴らして之を放伐したり殷湯の夏桀を討するの湯誓に曰く

王曰格爾衆庶悉聽朕言非台小子敢行稱亂有夏多罪天命殛之今爾有衆汝曰我后不恤我衆舍我穡事而割正夏予惟聞汝衆言

夏氏有罪。予畏上帝。不敢不正。今汝其曰夏罪其如台。夏王率遏衆力。率割夏邑。有衆率怠弗協。曰時日曷喪。予與汝皆亡。夏德若茲。今朕必往。爾尚輔予一人。致天之罰。予其大賚汝。爾無不信。朕不食言。爾不從誓言。予則孥戮汝。罔有攸赦。

又周武の殷紂を討するの泰誓に曰く。

惟十有三年春。大會孟津。王曰嗟我友邦冢君越我御事庶士明聽誓。惟天地万物父母。惟人万物之靈。亶聰明作元后。元后作民父母。今商王受弗敬上天。降災下民。沈湎冒色。敢行暴虐。罪人以族。官人以世。惟宮室臺榭陂池侈服。以殘害于爾萬姓。焚炙忠良。刳剔孕婦。皇天震怒。命我文考。肅將天威。大勳未集。肆予小子發。以爾友邦冢君。觀政于商。惟受罔有悛心。乃夷居弗事。上帝神祇。遺厥先宗廟弗祀。犧牲粢盛既于凶盜。乃曰吾有民有命。罔懲其侮。天佑下民。作之君。作之師。惟其克相上帝。寵綏四方。有罪無罪。予曷敢有越厥志。同力度德。同德度義。受有臣億萬。惟億萬心。予有臣三千。惟一心。商罪貫盈。天命誅之。予弗順天。厥罪惟鈞。予小子夙夜祗懼。受命文考。類于上帝。宜于冢土。以爾有衆。底天之罰。天矜于民。民之所欲。天必從之。爾尚弼予一人。永清四海。時哉弗可失。

然れども社會が進歩するに從つて秩序を重んずるの傾向を生ずるは古今東西の同く然る所にして漢族か革命の主義は深く人心の裡面に隱伏して之を發表するの機會さへあれは何時にても輝光を放ちて暴君汚吏をして寒心せしむ可しと雖も秩序は又永久强固なる國家の存立に必要なるを以て臣民たるものは天の代理者たる君主に服從せさる可らすと言ふ思想は之と共に發達したり是れ夏殷周の國祚か四百年以上の久きに達し

たる所以なり。故に君主を以て天の代理者とするの思想には必す二個の思想を含む。服從の思想と革命の思想と是れなり。

抑も秦六國を併せて海内を統一し。封建制度を打破し郡縣制度を建設してより以來。支那古今の局面全く一變したり。秦漢以來歷代の興亡なるものは大別して五類となす。一に曰く人民の蜂起。二に曰く權臣の簒奪。三に曰く敵國の併呑。四に曰く夷狄の侵入。人民の蜂起とは劉封(漢高祖)の秦に於ける。朱元璋(明大祖)の元に於ける。流賊の明に於ける是なり。權臣の簒奪とは王莽(新)の西漢に於ける曹丕(魏文帝)の東漢に於ける。司馬炎(晉世祖)の魏に於ける。劉裕(宋高祖)の魏に於ける。蕭道成(齊太祖)の宋に於ける。蕭衍(梁高祖)の齊に於ける。陳霸先(陳高祖)の梁に於ける。楊忠(隋高祖)の周に於ける。李淵(唐高祖)の隋に於ける。朱全忠(五代梁太祖)の唐に

於ける。石敬塘(五代晉高祖)の唐に於ける。趙匡胤(宋太祖)の周に於ける是なり。敵國の併呑とは魏の吳蜀に於ける。後周の北齊に於ける。隋の陳に於ける。宋の南唐、北漢、吳、越、蜀、江南に於ける。金の遼に於ける。元の金に於ける是なり。夷狄の侵入とは遼、金、元の宋に於ける。清の明に於ける是れなり。

果して然らは漢族革命の思想と以上五類とは何如なる關係を有するや。人民の蜂起は海内萬民か政府の綱紀振はす。威令行はれす。暴政苛歛相繼き。饑饉凶荒洊りに至り。上下離叛萬民怨望遂に内に亂を起す者にして秦の亡滅の如きは之に由れり。西漢の赤眉賊。東漢の黃巾賊。唐末の黃巢。元末の諸盜。明末の流賊。清の長髮賊の如き皆是れ人民の蜂起にして黃巾賊長髮亂の如きは宗教に托して愚民を煽動し。黃巢流賊の如きは陰鷙凶險なる姦雄之

か首倡をなして暴を縱にしたるを以て盜賊の名を與へられたりと雖も苟も漢高祖明太祖其人の如き者にして起るときは代天吊民の精神は獨り人民の蜂起にあるか如し而して三代以後革命の最も正大なるものは漢の秦に代り明の元に代る是れのみ盜賊の最も猖獗したる者は流賊長髮賊是れのみ然れとも漢高明祖にして事成れは漢高明祖のみ賴襄曰く漢高祖明太祖皆大盜の志を得たるものなりと實に然り而して漢族革命の精神は大盜の中に存するものなり

權臣の簒奪は王莽の漢に於ける曹丕の漢に於ける司馬炎の魏に於ける先つ其權を潛竊默移し然る後ちに之に迫りて位を禪らしめたるものなり然れとも堯舜の禪讓は漢族萬古の模範たるを以て權臣禪位の事を議する毎に口を堯舜の禪讓に藉らざるは無し敵國の併呑に至りては即ち是れ兵力の强弱大小を以て相爭ふものにして革命の思想には殆と關係なきものに似たり

漢族か外狄を賊斥するは其風俗習慣を異にするを以てのみ拜自然教の信徒たらさるを以てのみ故に戎狄を賊斥するは今日と雖も猶彼等の腦裡に印鏤せられて去る可らす然るに漢族か歷代外狄の足下に跪き甘んして臣妾と稱するものは是れ亦た革命思想の變象のみ革命思想は王者の種族を問はす土地を問はす姓氏を問はす唯た其道如何と問ふのみ舜東夷之人也文王西夷之人也華而用夷禮則夷之夷而用華禮則華之苟も其道を得るものあらは之を拜して帝王とする可なり夷狄何かあらんや

とは漢族の思想古代より然る所にして。豈に契丹、女眞、蒙古、滿州其支那中國に入るを待つて然る後ちに發生したるの思想ならんや。彼れ長髮賊の首魁洪秀全か滿清を討するの檄は。專ら愛親覺羅氏の夷狄たるを賊斥して漢族を煽動せんと企てたり。之に反して曾國藩か長髮賊を討するの檄は專ら長髮賊か中國の禮教を棄て耶蘇の教法に從ふことを痛哭して漢族を激勵せんと試みたり。然るに洪秀全の煽動は其効を奏せず。曾國藩の激勵は其の効を奏したり。漢族か拜自然教の信仰を以て夷狄を賊斥するの感情に易へさることは。此に於て見るへきなり。

洪秀全伐滿檄

夫天下者中國之天下。非胡虜之天下也。寶位者中國之寶位。非胡虜之寶位也。子女玉帛者中國之子女玉帛。非胡虜之子女玉帛也。慨自

季陵夷。韃虜乘釁。竄入中國。盜竊神器。而當時官兵人民。未能共憤義勇。驅逐出境。掃清羶穢。反致低首下心。爲其臣僕。迄今二百餘年。濁亂中國。鉗制兵民。刑禁法維。無所不至。而一切英雄豪傑。莫不爲其制。而甘爲之用。嗟呼實足令人惡之痛心。恨之刺骨矣。

曾國藩討賊檄

自唐虞三代以來。歷世聖人。扶持名教。敦叙人倫。君臣父子上下尊卑。秩然如冠履之不可倒置。粤匪竊外夷之緒。崇天主之教。自其僞君僞相。下逮兵卒賤役。皆以兄弟稱之。謂惟天可稱父。此外凡民之父皆兄弟也。凡民之母皆姊妹也。農不能自耕以納賦。而謂田皆天主之田。商不能自賈以取息。而謂貨天主之貨。士不能誦孔子之經。而別有所謂耶蘇之教新約之書。舉中國數千年禮義人倫詩書典則。一旦掃地蕩盡。此豈獨我大清之變。乃開闢以來名教之奇變。孔子孟子之所以

痛哭于中原。凡讀書識字者。又烏可袖手安坐不思一爲之所也。

拜自然敎が漢族の政治上に及ぼしたる第二の影響は。法制是れなり。唐虞、夏殷各々法制ありと雖も。綱羅折衷して之を大成したるものは周公旦にして。其制定したる周官は誠に支那萬世不磨の大典なりとす。漢、唐、宋、明は措て論せず。今日清朝の法制の如きも亦た周官の遺制に外ならざるのみ。今且つ官制の一例を擧けて之を言はんに。

周ノ六官

冢宰（邦治ヲ掌リ百官ヲ統ヘ四海ヲ均クス）
司徒（邦教ヲ掌リ五典ヲ布キ兆民ヲ優ス）
宋伯（邦禮ヲ掌リ神人ヲ治メ上下ヲ和ス）
司馬（邦政ヲ掌リ六師ヲ統ヘ邦國ヲ平ニス）

清ノ六部

吏部（中外文職ノ銓叙黜陟ヲ掌ル）
戶部（土田戶口財穀ノ政及出納ノ平準ヲ掌ル）
禮部（吉凶軍賓嘉五禮ノ秩序學校貢舉ノ法ヲ掌ル）
兵部（中外武官ノ銓選及軍實ノ簡閱ヲ掌ル）

司寇（邦禁ヲ掌リ姦慝ヲ詰メ暴亂ヲ刑ス）
司空（邦土ヲ掌リ四民ヲ居シ地利ヲ時ニス）

刑部（法律刑名ヲ掌ル）
工部（工虞器用及辨物疏材ヲ掌ル）

封爵制軍　周官王畿方千里を以て天子の國とし。諸侯を公、侯、伯、子、男の五等に班ち、公國は方五百里。侯國は方四百里。伯國は方三百里。子國は方二百里。男國は方五十里とし。天子の制軍は六軍。車万乘。諸侯の制軍大國は三軍。車千乘。次國は二軍。小國は一軍。車百乘とす。天子に三公。九卿。二十七大夫。八十一元士あり。諸侯、亦各三卿、大夫、士あり。國の大小に從つて爵の高下。祿の多少亦各同からす。而して大國諸侯の中功勳あるものは。之を以て州牧若くは方伯となし。諸侯の不逞なるものを征伐することを許したり。又其征伐に至りては大司馬九伐の法あり。

巡守朝覲　天子は五年に一回侯の國を巡狩し。四岳を祀り。民間

の歌謠を聽て其民風を觀。市場の貨物を陳して民俗の好尙を察し。律、禮樂、制度、衣服を同くし。其山川、地祇を祀らさるものは地を削り。宗廟の祭を修めさるものは爵を降たし。禮樂を變するものは之を流し。制度、文物を革むるものは之を討し。民に功勳あるものは封を增し。爵を進む。諸侯は五年を以て天子に、一朝。三年を以て大聘し隔年に小聘し土物を貢し政績を奏す。

祭祀宗廟　天子は天地を祭り。諸侯は社稷を祭り。天子は天下の名山、大川を祭り。諸侯は名山大川の其封內に在るものを祭る。天子は七廟。諸侯は五廟。大夫は三廟。士は一廟。庶人は寢に祭るなり。」

周官六官の制は大畧上に旣に示すか如し。今其職分を擧くへし。

冢宰　邦治を掌り、六典、八法、八則を以て邦國(諸侯)官府、都鄙(王畿)を綱紀し。八柄を以て王を佐けて威福を用ひ。九職を以て民に任し。九兩を以て民を繫き。賦貢式を以て財用を理す。而して小宰、宮正、宮伯、膳醫等皆之に統屬せり。

大司徒　邦敎を掌り。土地人民を統へ。土會の五物に因りて十二敎を施し。土宜土均を以て民を富まし。財を斂め。封域を圭して形勢を審にし。荒政を以て民を聚め。保息本俗を以て民を安んす。而して郊野、市邑、門關、山澤の吏皆之に統屬せり。

大宗伯　邦禮を掌り。禮樂を統へ。五禮を以て政本とし。九儀を以て位を正し等を辨す。而して樂工、卜祝等の官皆之に統屬せり。

大司馬　邦政を掌り。邦國を平にす。九儀の法を以て之を平にし。九伐の法を以て之を討す。而して、司士群臣の版を掌り。爵祿の廢置を設け。諸子國子の戒令敎治を掌り。職方氏天下の地を掌り。其利害を知り軍政を以て諸侯を駕馭し。此他射御、騶從、甲兵の官皆之

に統屬せり。

大司寇　邦禁を掌り。三典五刑を以て民を正す。

今六官の中に就て大司徒の掌る所は。關係尤も大なるを以て之を詳說せんに。先つ十二敎とは(一)祀禮卽ち祭祀にして。天神地祇人鬼の差別あり。(二)陽禮卽鄉時。飲酒及ひ冠禮、賓禮。(三)陰禮卽婚姻。喪紀。(四)樂禮卽樂舞。(五)儀敎卽君臣。父子等の儀あり。(六)俗敎卽保息、本俗。(七)刑敎卽鄉の八刑、不孝、不時、不姻、不弟、不任、不恤、造言、亂民。(八)誓敎卽比閭、族黨、相互に救恤せしむ。(九)度敎卽田祿、朋食、器用皆制度あり。(十)事敎卽稼穡、樹藝、作材、阜蕃、飾材、通材、化材、斂材、生材。(十一)爵制卽德を勸む。(十二)祿制卽行を勸む是れなり。而して慈幼、養老、振窮、恤貧、寬疾、安富、之を保息と曰ひ。比宮室、族墳墓、聯兄弟、聯師儒、同衣服、之を本俗と曰ひ。知、仁、聖、義、忠、和、之を六德と曰ひ。孝、友、睦姻、

任、恤、之を六行と曰ひ。禮、樂、射、御、書、數、之を六藝と曰ふなり。

然り而して其天子を天に比し。五嶽を以て三公に比し。四瀆を以て諸侯に比し。家宰を以て天官とし。大司徒を以て地官とし。大宗伯を以て春官とし。大司馬を以て夏官とし。大司寇を以て秋官とし。大司空を以て冬官とし。其政令に至りても

立春　天子親帥三公九卿諸侯大夫。以迎春於東郊。還。反賞公卿大夫於朝。命相布德和令。行慶施惠下及兆民。慶賜遂行。毋有不當。乃命大史守典奉法。司天日月星辰之行。宿離不貸。毋失經紀。以初爲常。　是月也天氣下降。地氣上騰。天地和同。草木萌動。王命布農事。命田舍東郊。皆脩封疆。審端徑術。善相丘陵阪險原隰土地所宜五穀所殖。以敎道民。必躬親之。田事旣飾。先定準直。農乃不惑　孟春行夏令。則雨水不時。草木蚤落。國時有恐。行秋令。則其民大疫。猋

風暴雨總至。藜莠蓬蒿並興。行冬令則水潦爲敗。雪霜大摯。首種不入。

立夏　天子親帥三公九卿大夫。以迎夏於南郊。還。反行賞封諸侯慶賜遂行。無不欣說。乃命樂師習合禮樂。命太尉贊桀俊。遂賢良。舉長大。行爵出祿。必當其位。　是月也天子始絺。命野虞出行田原。爲天子勞農勸民。毋或失時。命司徒循行縣鄙。命農勉作。毋休于都。孟夏行秋令。則苦雨數來。五穀不滋。四鄙入保。行冬令則草木蚤枯。後乃大水。敗其城郭。行春令則蝗蟲爲災。暴風來格。秀草不實。

立秋　盛德在金。天子乃齊。立秋之日天子親帥三公九卿諸侯大夫。以迎秋於西郊。還。反賞軍帥武人於朝。天子乃命將帥。選士厲兵。簡練桀俊。專任有功。以征不義。詰誅暴慢。以明好惡。順彼遠方。　是月也農乃登穀。天子嘗新。先薦寢廟。命百官始收斂。完隄坊。謹壅塞。

以備水潦。脩宮室。坏垣牆。補城郭。　孟秋行冬令。則陰氣大勝。介蟲敗穀。戎兵乃來。行春令。則其國乃旱。陽氣復還。五穀無實。行夏令。則國多火災。寒熱不節。民多瘧疾。

立冬　盛德在水。天子乃齋。立冬之日。天子親帥三公九卿大夫。以迎冬於北郊。還。反賞死事。恤孤寡。　是月也。天子始裘。命有司曰。天氣上騰。地氣下降。天地不通。閉塞而成冬。命百官。謹蓋藏。命有司。循行積聚。無有不斂。坏城郭。戒門閭。脩鍵閉。慎管籥。固封疆。備邊境。完要塞。謹關梁。塞後徑。飭喪紀。辨衣裳。審棺椁之厚薄。丘壟之大小。高卑厚薄之度。貴賤之等級。　孟冬行春令。則凍閉不密。地氣上泄。民多流亡。行夏令。則國多暴風。方冬不寒。蟄蟲復出。行秋令。則霜雪不時。小兵時起。土地侵削。

と云ふか如き。千七百七十三國を封建し。三百六十官を制定する

一として天に法らさるはなく。一として地に象らさるはなく。拜自然教の精神は。悉く周公の法制に化現したりと謂はさる可らす。而して之を法制目的の上よりして觀察するときは。(第一)完全なる國家は天を以て理想とすること。(第二)國家の目的は完全なる人民卽智、德、躰の三力に於て發達する人民を造るに在ること是れなり。

然れとも。周公の法制か其明文の如く。當時に於て久く行はれさりしこと。又後世に行はれさりしこと。猶ほ秦漢以後の革命か。堯舜湯武の禪讓放伐の如くならさりしと一般なるは。歷史の證明せる事實なるも。秦漢以後の革命と法制とか遂に之か範圍を出る能はさるは。亦た歷史の證明する事實なり。

第五章　哲學及文學

拜自然教より生したる支那哲學文學の發達は左の如し。

甲、支那哲學は皆倫理的の目的を有すること。

乙、支那倫理は皆現世的の目的に止ること。

以上の結果たる左の如し。

丙、支那哲學を理論の點より見るときは。問題の範圍極めて狹小なること。

丁、支那哲學を實際の點より見るときは。經驗上の價値多きこと。

有形世界を離れたる不生不滅。無始無終の靈体を認めす。未來世界の存在を認めさる。拜自然教徒の思想は。固より此の如くならさるを得す。本論の首章に引用したりし。米國の一人士か。支那に

詩なし思想なしと云へるは。豈に善く事實を穿ちたるの語なり。詩なしとは雄大美妙なる想像なしと云ふの意義に非すや。思想なしとは深奥宏大なる形而上學なしと云ふの意義に非すや。彼れその智識想像の目的を以て倫理的とし。倫理の目的を以て現世的とするものにして。雄大美妙自然に超絶したるの想像を有し。深奥宏大經驗に超絶するの思想を有せんことは。萬々道理に於て有り得へからさるの事實なり。然らは支那國民に向て。何か故に「マハバラタ」「ラマラヤ」を出さゝりしや。何か故に「プラトン」「アリストテレス」を出さゝりしやと。詰問するは是れ漢族固有の性質を知らさるものなり。

然り而して。吾人は以上四個命題を證明せんか爲めに。先づ順序を逐ふて支那哲學の大畧を述べざる可からず。

易

支那哲學の最も古きものを易とす。易は伏羲氏始めて八卦を畫し。周の文王殷紂の爲めに姜里に囚はれ。八卦を畫して六十四爻として卦辭を作り。周公旦又爻辭を作り。孔子十翼を作たりと云ふは普通の說なれども。後世學者反對の說をなすもの亦少なからず。今此諸說の眞僞を究むるは吾人の務むる所にあらず。吾人は唯だ易は支那の最古なる哲學思想にして數百千年の間に發達せられたるものなりと云ふの事實を以て足れりとするのみ。若し夫れ夏には連山と曰ひ。殷には歸藏と曰ひ。周には周易と曰ふて差別を立るものあれとも。是唯だ名稱の異なるのみ。其實に至りては同じきなり。

易は大極、陰陽、八卦、六十四爻を以て名目とす。八卦とは乾(天)、兌(澤)、

離(火)、震(雷)、巽(風)、坎(水)、艮(山)、坤(地)、是なり

夫れ漢族が陰陽の思想たるや此自然界の多樣として秩序なるを觀察し。之を概括して兩性に分ちたるに起れり。例へば四時、晝夜、生死の如きは是れ變化するの上に關して陰陽あるものなり之を變易と曰ふ。天地日月男女の如きは交對するの上に關して陰陽あるものなり之を交易と曰ふ。然るに春は生長を以て陽とし。秋は肅殺を以て陰とし。晝は明を以て陽とし。夜は暗を以て陰とし。生は顯を以て陽とし。死は幽を以て陰とし。天は動を以て陽とし。地は靜を以て陰とし。日は熱を以て陽とし。月は冷を以て陰とし。男は剛を以て陽とし。女は柔を以て陰とする時は。彼等は此多樣なる事物の通性として。陰陽といふ一大概括の思想を形成することを得たるへし。而して陰陽とは此の如く天地間有機無

機の萬有に通して概括したるの思想なるを以て。其思想は固より漠然たるへしと雖も。天地萬物は能動(ナチュラ、パッシブレイター)、所動(アクレション、リアクレション)の二力を以て運動を起し。厚動、反動の二態を以て變化を成すことは。是れ今日の學者と雖も亦許す所なり。其盛は既に其中に衰の機を伏し。進は既に其中に退の機を伏し。弱或は强に勝ち。柔或は剛を克するは蓋し亦た人事界の常務ならん。而して漢族は四千年前に於て夙に既に此理を看破し。陰陽の兩性を以て自然界人事界の性質、作用、關係を概括し。自然界の顯はれて見易き現象を類推して。人事界の隱れて知り難き現象を解釋せんと試みたり。是を易の本領とするなり。

繫辭傳に。易有二大極一。是生二兩儀一。兩儀生二四象一。四象生二八卦一。八卦定二吉凶一。吉凶生二大業一。是故法象莫レ大二乎天地一。變通莫レ大二乎四時一。懸象著明。莫レ大二

乎日月崇高莫大乎天地備物致用立成器以爲天下利莫大乎聖人」とあるは實に數語を以て易の大要を盡したりと謂ふへし。然れども大陽なるものは陰陽未判の前を指稱したる空名空位にして陰陽を離れては別に何の作用もなきものなり故に此を以て佛敎の眞如と同視するが如きは最も誤解の甚きものと謂ふへし。而して備物致用立成器以爲天下利莫大乎聖人と云ふものは易の目的か明に實用に外ならざるを示めしたるものなり。

然るに易の原理は既に陰陽の二種に盡きたりとするも之を以て人事の複雜變化無窮なるの現象を解釋せしことは到底望み難きを以て純陰純陽を乾坤二卦となし二陽在下一陰在上を兌とし二陽在上下一陰在中を離とし一陽在下二陰在上を震とし二陽在上下一陰在中を巽とし二陰在下一陽在上を艮として陰陽兩性の錯綜變化を極め更に八卦を重ねて六十四爻とし六十四爻を重ぬて三百六十爻となし以て一切人事の變態を盡したり。

是に由りて之を觀れば世の儒者或は易を以て深奥宏大なる哲學の如くに思ふものありと雖も其實は實用を以て目的とするものにして無形無象の理を探るものにあらざるなり。

易を以て人事界の現象を說明したるものとするときは易は一種の倫理哲學となるなり又之を以て占筮とする時は鬼神の感通と云ふ一種の宗敎となるなり。

洪範

洪範は殷の箕子が周の武王に授けたるものにして其源は河圖洛書なり武王殷に克ち周を興したるの十三年箕子を召し之に

問ふて曰く。嗚呼天は下民を攝理するも。我其秩序を知らず。汝我が爲めに之を授けよと。此に於て箕子乃ち洪範を以て武王に敎へたり。

洪範の九時とは

五行　一水。二火。三木。四金。五土。
五事　一貌。二言。三視。四聽。五思。
八政　一食。二貨。三祀。四司空。五司徒。六司寇。七賓。八師。
五紀　一歲。二日。三月。四星辰。五曆數。
皇極　皇建其有極。歛兹五福。
三德　一正直。二剛克。三柔克。
稽疑　一雨。二霽。三蒙。四驛。五克。六貞。七悔。
庶徵　一雨。二暘。三燠。四寒。五風。六時。

五福　一壽。二富。三康。四寧。五攸好德。六考終命。
六極　一凶短折。二疾。三憂。四貧。五惡。六弱。

皇極とは天子の位なり。皇其極を建るとは。三德一權に由るなり。三德とは上に言ふたる正直剛柔にして。一權とは威福なり。天子よして德と權とを失するときは。其極を建る能はさるなり。而して其結果は。八政は治らず。五行五紀其叙を失し。五事貌は恭ならず。言は從ならず。視は明ならず。聽は聰ならず。思は睿ならず。稽疑は其中を得ず。庶徵は咎徵と變して。風雨寒暑其和を得ず。遂に六極を現ずるに至るなり。

之に反して皇其極を建るときは。五行五事は政五紀其叙を得。稽疑中り。休徵至り。遂に五福を歛めて。庶民に錫ふことを得るなり。然らば萬民が天時人事に於て。福を得るも禍を得るも。一に天子

れ關するなり。而して天子は何を以て能く萬民の禍(六極)を去りて。福(五福)を招かしむることを得るやと云ふに。一敬以五事二農用八政三協用五紀四建用皇極五治用三德六明用稽疑七念以庶徵八嚮用五極威用六極と云へば。何を先きとして着手するも。禍福を生ずることを得るなり。

故に天子は。動靜云爲の間に。天時人事に變動を生し。或は人事より天時に感應を及ぼし。或は天時より人事に影響を及ぼす。而して最終の結果は。萬民の禍福に外ならず。萬民福を得れは天子其位を安んし。萬民禍を獲れは天子其位を安んずる能はず。而して天子の其位を安んずると。安んぜざるとは。天子自ら其極を建ると。建てざるとに由りて。萬民の向背は畢竟皇極の反響たるに過きざるのみ。

凡そ帝王が天の代理者として。其位を保つことは。拜自然教の精神なれども。之れが順序を立てゝ。說明を作したるは洪範に如くはなし。故に洪範は易と同く漢族最古の哲學たるのみ。

戰國諸子

戰國時代は周の封建政度が全く破壞せられたる時代にして。諸侯各舊法を廢し新制を興し。爭ふて富國强兵を斗るときにして。其破壞せられたる秩序の中より將來の大進步をなすべき元動力は既に生出てたり。外界の事情既に此の如しとせば。時人の思想亦豈に一大革命を受けざるを得んや。是に於てか老莊。管晏。申韓。陽墨。孫氏の徒奮然として興り。各其意見を組織して以て一家をなす。是を周末の諸子とするなり。而して後世學者或は老莊と列子を以て道家とし。申韓を以て法家とし。墨翟の流を以て墨家

とし。孫氏を以て兵家とし。管晏の流を以て政家とし。荀子の流を以て令家とする者あり。或は又孔孟をも諸子の中に加へて儒家とする者あるなり。

今此諸子の起原を尋ぬるに。兵家は司馬に源し。法家は司寇に源し。政家は司空に源し。而かも儒家のみ獨り諸家を總括して其全を得たるや明かなり。班固か諸子源流の說は誠に千古の卓見と謂つへし。

儒家者流。蓋出于司徒之官。助人君順陰陽明教化者也。游文於六經之中。留意於五德之際。祖述堯舜。憲章文武。宗師仲尼。其道最高也。

道家者流。蓋出史官。清虛以自守。卑弱以自持。此君人者南面之術。合於堯之克讓。易之謙謙。是其所長也。陰陽家者流。蓋出於義和之官。敬順昊天。曆象日月。敬授民時。此其所長也。

法家者流。蓋出理官。信賞罰。以輔禮制。易曰。先王以明罰勅政。此其所長也。

名家者流。蓋出於禮官。古者名位不同禮。亦數異。孔子曰。必也正名乎。名不正則言不順。言不順則事不成。此其所長也。

墨家者流。蓋出清廟之官。茅屋採椽。是以貴儉。養三老五更。是以墨兼愛。選士大射。是以上賢。宗祀嚴父。是以有鬼。此其所長也。

縱橫家者流。蓋出於行人之官。孔子曰。誦詩三百。使於四方。不能專對。雖多。亦奚以爲。又使乎。使乎言其當權。受制宜。受命而不受詞。此其所長也。

雜家者流。蓋出於議官。兼儒墨。合名法。知國體之有。此見王制無不貫之。此其所長也。

農家者流。蓋出於農稷之官。播五穀。勸耕桑。以足衣食。故八政曰。一曰食。二曰貨。此其所長也。若派而別之。則應有九。若總而合之。則同族儒宗。

蓋し周公六官の制度は禮樂刑政教化を以て。皆國家を發達せしむるに必要なるの機關として之を組織したり。然るに周の制度か一旦破壞し。六官各々支離分裂して諸家となる。亦勢の自ら然らしむる所なり。而して世の論者。周末の諸子は思想の自由によりて發達したりと云ふと雖とも。曷そ知らん思想の種子は既に周官の制度の中に存するものあるを。

抑も申韓の如き法家の目的は國家に在り。政家の目的とする所富强に在り。兵家の目的とする所戰攻守にあるは固より論ずるを俟たず。陽墨二子の相爭ふ所の者兼愛自愛に外ならず。孟荀の

異なる所は性善性惡に在れば。是其目的の倫理を離れさること亦知る可し。戰國諸子か其議論の根據とする所何如に異なるも。未た嘗て人類社會の實用に出る者なし。之れ亦以て吾人が前に述べたる二個の命題。即ち支那哲學は其目的の實際なること。其觀察の餘りに抽象的ならざることを證明する者に非ずや。吾人は元と諸子の大意を揚けて其主義を批評し。以て支那哲學が何如に拜自然教の元則に從て發達したるかを述んと欲すれとも。何如にせん今其餘暇なきを以て。獨り老子の哲學が實際目的を離れて。深遠幽意殆んと他に其比類なしと云ふ所以の忘想を破し。老子哲學も亦拜自然教の範圍外を出でさることを證明せんとす。是れ吾人が責任たるのみ。

老子が無名天地之始。有名万物之母。(イ)道冲而用之。或不盈。淵乎。似

万物之宗。(ロ)谷神不死。是謂玄牝。玄牝之門。是謂天地根。(ハ)天地所以能長且久者。以其不自生。故能長生。(ニ)視之不見名曰夷。聽之不聞名曰希。搏之不得名曰微。此三者不可致詰。故混而爲一。(ホ)有物混成。先天地生。寂兮寥兮。(ヘ)と曰へるは。何如にも此の有形世界を離れたる不生不滅の靈体を捉へて。天地万物の源となすに似たりと雖も。其の實老子の目的は決して現世を脱して來世を求むるにあらず。國家を脱して理想を無形の境に求むるにあらざるは。其目的の實用にして。毫も國家を離れざるを以て知る可きなり。即ち其將欲奪之必固與之と云ひ。反者道之動。弱者道之用と云ひ。其愛大費必多と云ひ。天下多忌諱而民彌貧。人多利器國家滋昏。民多技巧奇物滋起。法令滋彰盜賊多有と云ひ。民之難治以其智多。以智治國之賊と云ひ。我有三寶寶而持之一曰慈二曰儉三曰不敢爲天下

先と云ふか如き。悉く謙遜退讓の德を頌賛せざるはなし。而して其中大に亦權謀の意を雜ゆるものなきにあらざるなり。要するに老子は世人が禮樂刑政の末のみに拘て。却て治國の本領を忘るゝを慨嘆して。世を驚かし俗を駭かすの奇論を爲す者に似たり。單に老子の中に虛無を宗とする者あるを以て。漢族の拜自然教に反對するが如く思ふは。未だ深く老子哲學を研究せざる者なり。

抑も老子の所謂虛無なる者は。果して自然界を離れたる存靈(Being)なるか。將た事物の狀態(Canditions)なるか。先つ此二者を判別し得るときは。老子哲學の位置を定むるに難からざるなり。吾人の見る所を以てすれは。虛無なる者は事物の運動を分て。自動的(active)他動的(Passive)とし。而して靈無は即ち他動的の狀態を指して

形容したる者に過ぎざるを以て存靈にあらずして狀態なること明かなり。果して然るときは是れを佛教の眞如と同一視するが如きは抑も又謬見の甚しき者と謂はざるを得ざるなり。老子の虛無にして果して存靈なりとする時は之を以て漢族が拜自然教に超越したる形而上學とするも可なりと雖之を以て狀態とする時は老子哲學は卽ち一種の尤も實用を重する倫理學とせざるを得ざるなり。

宋學

宋學は周敦濂溪先生邵雁康節先生程顥明道先生程頤伊川先生張載橫渠先生朱熹晦庵先生の諸儒を歷て大成したり。而して濂溪大極圖通書橫渠東西銘區蒙理窟康節皇極經世書あり程朱に至りては著書頗る多し。

宋學は儒教を組織して一大統系となしたるものなり。然れども專ら性理の說に發明する所あるを以て性理の學と稱し又專ら道德を說くを以て道學と稱す。卽ち淵源を四書六經に取りたるものを云へば大極陰陽は易に人心道心は書の禹謨に五行は洪範に性道教は中庸に明德新民は大學に仁義禮智信は論語孟子に性情義利は孟子に基きたるものなり。

大極　大極動ゐて陽を生じ動極りて靜なり靜にして陰を生し靜極りて復た動く一動一靜互に其根となりて陰陽を生するなり。

陰陽　陰陽交感和合して水火木金土の五行を生し五氣之を以て運し四時之を以て行はれ天地の間人物生々窮りなし。

天地　陰陽混沌として剖判せざるは天地未生の前なりとす二

氣既に剖判すれば。清きものは上りて天となり。濁れるものは降りて地となる。是を天地の開闢とす。

五行　陰陽二氣交感和合して。水火木金土を生し。五氣之を以て運し。四時之を以て行はれ。散して風雨となり。凝りて霜雪となり。流れて川となり。止りて山となり。人物生々窮りなし。人行の氣。其偏にして蔽なるものを草木鳥獸とし。其全にして靈なるものを人とす。

性情　人の性は仁、義、禮、智、信にして。其情は喜怒、哀樂、好惡、欲なり。而して性情は一心に統べらるゝなり。張子曰く心統性情者也。

理氣　性は理に發し。情は氣に發す。理は氣の法則。氣は理の發動。故に性を天理とし。情を人欲とするなり。

道心人心　人心の性理より發動するものを道心とし。形氣より

發動するものを人心とす。而して惻隱、羞惡、辭讓、是非の心は。仁、義、禮、智の四端なりとす。

鬼神　陰陽二氣は恒に屈伸往來す。其來るものを神とし。其去るものを鬼とす。故に人の生死は晝夜の往來と異なることなし。

五倫　君臣。父子。夫婦。兄弟。朋友。之を五倫とするなり。

五典　君臣義あり。父子親あり。夫婦別あり。兄弟序あり。朋友信あり。之を五典と曰ふなり。

中庸の道。問學、尊德、性によりて。朱、陸の二派に分れ。大學の致知格物によりて。朱、王の二派に分れたるが如きは。皆宋學範圍內の事のみ。支那哲學は或重要ならざるの点に於ては。佛教の感化を受けたるとなきに非ずと雖。其根本に至ては。即漢族固有思想の發達にして。決して外國の要素を交へざると明かなり。

文學

吾人が支那哲學に就て。拜自然教の發達を証明したる所は大畧此の如し。是より轉して。文學に就て更に論する所ある可し。抑も廣大なる想像と。廣大なる概括とに乏しきは。支那文學の特色たること前に論する所の如し。果して然りとせば。支那文學の發達たる又知る可きのみ。支那の一切の典籍を集むる者。之を類別して經、史、子、集の四者とす。若し文學を廣括なる意儀よりして曰ふ時は。固より此四者を包含す可しと雖。今や其狹き意義に就て云ふときは。吾人は支那文學と云ふ語を以て何の種類に關はらず。其修辭的の趣味ある者のみに限りて之を言はんとするなり。支那文學の發達も又分て三期とす。太古より秦、漢に至るまでを第一期とし。漢より隋、唐に至るまでを第二期とし。唐、宋以下を第

三期とするなり。第一期は即ち六經諸子の盛なる時代にして。支那文學の後世に向て發達す可き種子は。皆既に此時に於て發達せられたり。凡そ六經の文の典麗奥雅にして。善く其意を達するは言を俟たず。戰國諸子の文は或は明快。或は奇峭。或は簡潔或は森嚴なるは言を俟たす而して。漢の興るや司馬遷、賈誼、班固、揚雄の徒。皆雄大渾雅の文を作れり。之を概するに第一期の文は其思想精確斬新なるを以て。之を寫すの文字も亦殊更に修飾を用ゐすして大に活氣あるなり。秦漢に於て尤も發達したる文學は。(第一)註釋家の文學即ち鄭玄、馬融、孔安國の徒あり。(第二)歷史家の文。司馬遷、班固、劉向、賈誼の徒あり。司馬遷は支那歷史の模範として史記を著はし。大に漢族發達の事實を詳かにし。其眼光社會の各部局に透徹し尤も同感の情に强く。且其旅行より得たる經驗尤

も廣く。其文學より得たる智識亦も豐富なるを以て。誠に支那第一流の歴史家と爲すに足りて。後來の歴史家皆模範を此に取り。其範圍を出つること能はざるなり。班固は歴史の体裁に於ては。司馬遷の外に新に法門を開かすと雖。其叙事の周密。識見の精確に至ては。更に司馬遷の上に出つる者あり。劉向は司馬、班固の如き大歴史家にあずらと雖。尤も善く談話体に秦漢以上の逸事を傳へたり。賈誼は歴史を著はさずと雖。其著はせる過秦論の一篇は。識見の大文章の壯古今一人と曰ふも可なり。

鄭玄、馬融、孔安國等の註釋家に至ては。秦の始皇典籍を燔きたるの後より出て、非常なる苦勵を以て六經の文義を解釋し。以て善く其微旨を明にし。敢て自已の利説を雜へずして。考據必ず確實を求むるは。是其長所にして。漢學の一派は是より起れり。其獨り

儒教のみならず支那古文學より功業ある實に稱賛せさる可からず。而して漢に司馬相如。楊雄等の如き賦文の一種起れり。是れ專ら文字の巧麗富贍を競ふ者にして實用の文に非ずと雖。修辭の發達を爲すや又大なり。故に經、史、子集に種類を以て之を見るときは經と子とは第一期の上半に發達して。史は第一期の下半に發達せりと曰ふも可なり。

第二期とは卽ち漢より隋唐に至るまての間にして。思想を以て之を論するときは。此時期は種々異樣の元素あり。然とも文体を以て論するときは。支那文學の虛飾と形式とに流るゝ未だ此時期の如く甚しきはあらず。何を以てか形式と虛飾と云ふや卽ち駢儷の文体是なり。抑も此文体は漢魏に起て六朝に發達し。隋唐の初より至て尙ほ未だ除かれさるなり。今此駢儷文体が思想に與

へたるの結果を見るに。文字の修飾と措辭とは思想の自由を束縛し。事々必ず其對を求め。句々必ず其偶を求め。簡短にして意を盡す可きも。之を冗長ならしめざる可からず。精微にして論ず可きことも是を空漠ならしめさる可からさるとあり。故に此の如き文体は元來思想の缺乏より生したるの結果にして。其弊や益々思想の自由を束縛するを以て。斯の如き文体の流行する時代には。自由なる而も精微なる思想の發達は尤も望む可からず。是豈に虛飾を重して實用を輕する者に非すや。

第二期は果して文學の大家として后世に傳ふるに足る者あり。歷史家としては司馬遷、班固の躅を接くものなり。註釋家として は唯晉初杜預、何晏王肅、郭璞等の徒あるのみにして。是れ等と雖亦決して漢儒に比するに足らす。此他陸機、陸雲、謝靈運等ありて

浮華の文を作るも取るに足らす。又彼の竹林七賢の老莊の餘唾を竊みて以て高く自ら標榜し清談として後世風雅源を開くの文學としては實は價値なし。第二期の文學の發達する者は大抵此の如きに過きさるのみ。

然るに隋に至り五胡、南北以來久しく分裂したる海内を統一し。大に太平の基を立てんと欲せしか。僅に二世にして亡びたり。唐其遺業を受け德は海内を化し。威は四夷に振ふ。法制其美を盡し。文物其輝光を放ち。内は六朝以來殷富奢麗を極めたる江南の其有に歸し。外は回紇、吐蕃、突厥の諸部風を慕ふて降附するあり。秦漢以來一唐の盛なる大家唐の右に出つる者あらんや。是に於て唐朝は種々の宗教美術文學大に之を奬勵せしかば。即ち詩には李伯杜甫の如き大家續々輩出して其盛に達し。經學には孔穎達

を始として踵を漢に接したり。而して唐の太宗晉書を著はして歴史家の一を數へられたり。是に於て魏晉以來の駢儷文体の如きも韓愈を俟て初て改革せられ。虚飾形式を以て思想の自由を束縛したるの漢文も初めて實用に適するの文章となり。是を第三期の始めとす。

然るに唐は此の如く文學の發達其盛を極めたりしも。其末に及ては五代の亂離に沈淪し。兵厲天下に倥偬として文學地を拂ふこと百年なりしも。宋の起るに及て文學の盛又遠く前代に過くる者あるに至れり。蓋し宋哲學家歴史家の多きは殆ど唐に過きる者ありて。即ち歴史家としては歐陽修、蘇老泉、蘇東坡、陳龍川等の大家を生し。哲學家としては周茂叔、邵唐節、程明道、程伊川、陸象山、朱子以下輩出し前代其比を見ず。而して此等の歴史家哲學家

の思想を自由に發表せしむることを得せしめたる者は。即ち韓愈古文を稱へて六朝の駢儷文体を一變したるの力有りと云はさるを得ず。金元二朝に至ては。其政府より北方種族の建設に係るも。漢族文化の發達に至ては駸々として止らず。而て文學も亦之と共に發達せり。金に於ては詩人として見る可き者多し。元に於ては劇曲小説の一体尤も盛にして。後世に模範を垂れたり。

進て明に至ては三百年間文學の盛なる論を俟たず。文章の美に至ては、宋景濂、唐荆川、歸震川、茅鹿門、王元美、李于鱗の輩擧て數ふ可らず。宋學に至ては王陽明、陳白沙、劉戢山の如き大家あり。之を要するに明の文學は其異種豐富なる點に於ては。反て宋よりも勝る者あり。之れ亦自然發達の然らしむる所にして。殊に文學の發達に欽く可らさる批評は明よりして盛なり。今日の清朝に至

ては其文學大抵明の盛を受け。殊に康熙、乾隆の二帝海内の文人學士を招き。之をして編輯に從事せしめたるを以て。字書、地誌、歷史等の如き前代に得て見る可らざるの大著述續々として出て。殊に經學に至ては漢の註釋家と宋の理學家とを折衷して其美を集めたり。而て清朝文學上の特色と曰ふ可き者は。經學、史學其他の學問に於て考證を重し比較を尊び終に考證學派の一宗を開きたる是なり。如此く論し來れば將に見る可し漢族文學の發達も亦拜自然教の精神に從て發達し偉大なる想像と浩濶なる概括に乏しきを以て。西洋の意義にて謂へる。大哲學と大詩學はなしと雖。實用文學即ち歷史、地理、倫理學、及世界の情景を借りて。吾人の感情を模寫する詩に至ては。又世界他の國民に於て見る可からざるの發達を顯はせり。

蓋し想像を以て成立する詩の如き文學は。蓋し美術の一科として見るを得可し。而して美術なる者は。拜自然教の多神的元素が殊に人体的思想 (Personification) の方針を以て進歩するにあらざれは。其發達を見ること能はす。即ち歐洲文學の想像は皆希臘の美術に基づく者なり。而して支那の拜自然教は多神的を以て其要素としたりと雖。此特別の發達なし。是れ支那の文學に廣大なる想像を缺く所以にあらずや。

第六章　孔子及儒教

孔子は漢族の最偉大なる人物にして。儒教は漢族の國教なり。故

に拜自然教の理想を人化したるものは孔子にして其組織を大成したるものは儒教なり此を以て孔子及儒教を知らざるときは拜自然教を解することゝ能はさるなし。

依て吾人は(第一)孔子を討究し(第二)儒教を討究せむ。

孔子の一代は大別して修養時期施設時期退隱時期の三期とす。

今此三期に就き次第を逐て解說す可し。

修養時期

孔子姓は孔名は丘周靈王二十三年魯襄公二十四年を以て魯國の昌平陬邑に生れたり其先は宋人にして孔防叔と云ふ防叔伯夏を生む伯夏叔梁紇を生む梁紇顏氏の女と婚し夫妻丘尼に禱りて孔子を生めり孔子兒童の時嬉戲するや常に俎豆を陳らね禮容を設く稍長するに及んで博識にして而も禮を知るを以て

鄉人に知れたり然れとも素より貧しきを以て成人の後季氏に仕へ其委吏となりて料量平かなり司職の吏となりて牛羊蕃息せり十九歲にして宋の上宮氏の女を娶り二十一歲にして伯魚を生めり二十四歲にして其母顏氏歿したり二十九歲にして晉に適て琴を師襄に學たり三十四歲にして周に適きて禮を老聃に問ふて然る後に魯に歸れり。

傳の記する所は素より詳ならすと雖も今當時の事情に就て之を考ふるに孔子は幼時當時の教育法に從て禮樂射御書數の六藝を學ひたり天資勤敏なるを以て學問日に博く德器日に就り自己の學ふ所は好んて之を他人に教へたり此を以て孔子の名聲漸く顯るゝに從て遠近より來訪して道を聞くもの益々多く年未た三十ならすして既に數多の弟子を有し學を講し道を論

し。其古を好み學を勤むるや。苟くも有名の人物あれは千里の遠きを辭せすして往て其道を問はざるはなし。即ち晉に適て琴を師襄に學ひ。周に適て禮を老聃に問ひ。樂を萇弘に問ふたるものは。皆孔子か衆美を集めて大成するの一端にして。所謂聖人無恒師とは豈是れを謂ふにあらさる歟。

凡そ孔子其見聞する所。其學問する所に從て。之を思辨するの精しき。之を玩味するの深き。又之を取捨するの明なるは。實に修養の有せし所なり。其周に適き禮を老聃に問ふや。老聃孔子に語て曰く。

子所言其人與骨皆已朽矣。猶其言在耳。且君子得時則駕。不得則蓬累而行。吾聞良賈深藏如虛。君子盛德容貌如愚。去子驕氣與多慾。態色與淫志。皆無益於子之身。吾之所告子者若此而已。

然るに孔子は之を聞て。喟然として嘆して曰く。

鳥吾知其能飛。魚吾知其能游。獸吾知其能走。走者可以爲罔。游者可以爲綸。飛者可以爲矰。至於龍吾不能知。其乘風雲而上天。吾今日見老子。其猶龍耶。

孔子一日門人と共に泰山の麓を過きしときに一婦人あり。路傍に在りて哭聲甚だ悲し。孔子子路をして其故を問はしめたるに。婦人答へて曰く。吾舅虎に食はれて死せり。吾夫虎に死せり。今又吾子虎の爲めに殺されたり。孔子曰く何故此地を去らさりしや。婦人答て曰く苛政なり。孔子之を聞き門人に謂て曰く。小子記憶せよ苛政は虎よりも猛しと。是れ孔子か到る所に於て時政民俗に着眼したるの一斑を見るに足さるか。孔子は古道を好むと雖も往代の制度文物に就て。必す其得失を考へ其長短を比較し。而

して之を至當の理に折衷せり。故に曰く行夏之時乘殷之輅服周之冕。又曰く周鑑於二代。郁々文哉と。是れ又孔子か集めて大成するの一斑を見るに足らさるか。

然り而して孔子の偉大なる感化を後世に及したるは。獨り其主義のみにあらすして其品性にあるなり。孔子は果して如何なる人物なりしかは。論語及ひ孔子家語を玩味して之を知ることを得可し。今此に其一斑を曰はんに。孔子の親戚故舊朋友門人に懇切なりしことは尤も其著しき者なり。孔子の故人に原壤なる者あり。其人は惡人にあらすと雖も傲慢無禮にして。而も一種風變りの人物なりしと疑ひなし。然るに原壤の母死したるを以て孔子は其葬事を助けて棺を治めたりしに。原壤木に登り忽ち歌て曰く。予か歌はさるや久し。女手の卷然たるは猶狸首の班然たるか如しと。是れ何等の亡狀なるぞ。而して孔子は聞さるものゝ如くして其前を過きたり。門人孔子に謂て曰く。夫子何ぞ絶交せさるや。孔子答て曰く。吾聞く親者は其親たるを失ふなく。故者は其故たるを失ふことなしと雖も。然れとも孔子は決して物好きを以て原壤と交はり其無禮を忽にせしにあらさるなり。孔子晩年の後一日原壤を訪ひしに。原壤箕踞して孔子を待てり。孔子叱し曰く。幼而不孫弟。長而無述焉。老而不死。是爲賊。以杖叩其脛と云ふを以て之を見れは。孔子朋友門人に對する懇切溢か如きの中に於て凜然として犯す可らさるの威嚴あり。而も時としては直言厲色之を折して。其罪を責め。其過を改めしむるに熱心なりしを知る可きなり。

孔子門人を集むること前後三千人にして。其内には列國公卿大

夫の子弟もあり。士庶人の子弟もあり。而して其中七十二人を達者とするは。身六藝に通するを以てなり。又其中十哲とて。顏淵。閔子騫。冉伯牛。仲弓の德行。宰我。子貢の言語。冉有季路の政事。子游子夏の文學是れなり。而して此七十子か。孔子を慕ふて。之に心服したるは。孔子の死後を以て。是を見るへし。孔子已に歿し。門人三年の喪を治め。將に歸らんとす。相對して哭し。號泣の餘り失聲して歸れり。然るに。子貢獨り室を孔子墓塲の傍に築き。更に復た三年の喪を治めて去りしと云ふ。凡そ是等は皆人生普通の感情にして。孔子は即ち普通感情を代表したるの人物なりと謂はさるを得さるなり。其他孔子の品性として尤も著しきものは勤敏なり。謙遜なり。好學なり。深思なり。剛毅なり。寬容なり。論語に

學而時習之。不亦說乎。

學而不思則罔。思而不學則殆。

朝聞道。夕死可矣。

敏而好學。不恥下問。

君子博學於文。約之以禮

必也臨事而懼。好謀而成者也。

居之無倦。行之以惠。

人無遠慮。近憂。

十室之邑。必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。

夫子循々然善誘我。博我以文。約我以禮。

如有周公之才之美。使驕且吝。其餘不足觀也已。

夫子溫、良、恭、謙、讓、以得之。

學而不厭。誨人不倦。

老者安之。朋友信之。少者懷之。

君子食無求飽。居無求安。

敏於事。而慎於言。

士志於道。而耻惡衣惡食者。未足與議也。

君子欲訥於言。而敏於行。

志於道。據於德。依於仁。游於藝。

發憤。忘食。樂以忘憂。不知老之將至

多聞擇其善者而從之。

士不可以不弘毅。任重而道遠。

篤信好學。守死善道。

毋意。毋必。毋固。毋我。

主忠信。毋友不如己者。過則勿憚改。

君子敬而無失。與人恭而有禮。

君子以文會友。以友輔仁。

剛毅木訥近仁。

小不忍則亂大謀。

吾嘗終日不食。終夜不寢。以思。無益。不如學也。

君子有三畏。畏天命。畏大人。畏聖人之言。

飽食終日無所用心難矣哉。不有博奕者乎。爲之猶賢乎已。

寛則得衆。信則民任焉。敏則有功。公則說。

以上論語に於て孔子の言行を記したるもの。皆以て孔子の品性を觀るに足らずや。而して是等の品性も亦自己の修養より來りしものなり。

施設時期

魯昭公二十五年。孔子年三十五なりしか。昭公齊に出奔して。魯國大に亂れたりしが爲めに。孔子亦齊に適き。高昭子に因りて齊景公に見へたりしに。景公は孔子を封するに尼谿の田を以てせんと欲したりしも。晏嬰之れを沮みたるを以て其事止み。孔子魯に歸れり。魯定公元年。孔子年四十三。權臣季氏强僭。其臣陽虎政を專にせしを以て。仕へすして野に退き。詩書。禮樂を修めしに。弟子四方より來るもの彌々多し。孔子五十一歲の時。定公孔子を以て中都の宰とす。在職一年にして治績大に顯れ。四方之れに則れり。中都の宰より司空となり。遂に進て大司寇となれり。十年孔子定公を助けて齊侯と夾谷の會をなし。禮を以て齊を樽俎の間に折衝せしかは。齊人大に懼れて魯の侵地を還せり。定公十二年。孔子魯國權臣の勢を削りて。公室の權を强めんと欲し。子路をして季氏

が宰たらしめ。三都を墮ちて其甲兵を收めたり。十四年孔子遂に進て宰相となり。太夫少正卯を朝に誅し。姦黨をして屏息せしめ。一國の人心を一新して魯國大に治まれり。是に於て權臣之を內に嫉み。强國之を外に沮みたるを以て止を得すして魯國を去り。衛の靈公遂に用ゆる能さりし。依て孔子は晉に適て趙簡子を見んと欲せしか。河に至りて賢太夫犢鳴舜華か殺されたるを聞て。美哉水。洋々乎。丘之不濟此命也夫。と言ふて途より還れり。陳蔡に於て難に遭ひしか。楚の昭王兵を以て之を迎へ封するゝ書社の地七百里を以てせんと欲せしに。令尹子西之を遮りたるを以て。孔子志を楚に得すして復た衛に還り。遂に魯國に歸れり。孔子國を去りてより。列國に周流する凡十四年にして歸國せり。歸國の時は年既に六十八歲なりしなり。

孔子の當時に對する目的は。如有用我者吾其爲東周乎。と自言したるを見て知る可し。魯國を富强ならしめ其力を以て。周室を輔翼し。王道を振興し。秩序を挽回し。萬民を敎化して。風を移し。俗を易へ太平至治の澤を被らしむるにあるなり。然るに不幸にして魯國は權臣强く。公室弱くして。孔子の爲す所を悅ばざりし。依りて孔子は止むを得ずして。齊衞晉楚を首とし十有餘年間七十二國に周遊せしかとも。志を得さりし。然れとも孔子か此の如く諸國に周遊して。其道を行はんとせしは。初めより道の行はれさりしを知りて。栖々遑々たりしにあらず。又實行せられ難き空論を以て。諸侯を煽動したるにあらず。其魯國に於て中都の宰となり。一年にして長老異食。强弱異任。男女別途。路不拾遺。の治績を奏し。宰相となりて。少正卯を誅し。姦黨をして屏息せしめ。三都を墮ち

て。權臣の勢を削り。齊と夾谷に會して侵地を返さしめたるの伎倆は赫々として列國の耳目を聽かしたり。加之ならず。孔子の門人には列國士太夫の子弟も多く。孔子の盛德は既に海內に聞へたるを以て到る處として。大抵歡迎せられさるはなし。然して之を沮みたるは猜忌にあらされは。則ち嫉妬にあらさるはなし。卽ち齊景公封公するに尼谿の田を以てせんとせしや。晏嬰沮みて。夫儒者。滑稽而不可軌法。倨傲自順。不可以爲下。崇喪遂哀。破產厚葬。不可以爲俗。乞貸不可以爲國。自大賢之息。周室既衰。禮樂缺有間。今孔子盛容飾。繁登降之禮。趨詳之節。累世不能殫其學。當年不能究其禮。君欲用之以移齊俗。非所以先細民也。と云ひしか如き。孔子陳蔡の間にありて將に楚に適かんとせしとき。陳蔡の太夫相謀りて。孔子賢者所刺譏。皆中諸侯之疾。今者久留陳蔡之間。諸太夫所設行。

皆非仲尼之意。今楚大國也。來聘孔子。用於楚。則陳蔡用事太夫危矣。と云しか如き。既に楚に至りて。楚昭王封するに書社の地七百里を以てせんとせしときに。令尹子西之を沮みて王之使使諸侯有如子貢者乎。王之輔相有如顏回者乎。王之將帥有如子路者乎。王之官尹有如宰予者乎。今孔丘述三王之法。明周召之業。王若用之則楚安得王乎。夫文王在豐。武王在鎬。百里之君。卒王天下。今孔丘得據土壤。弟子爲佐。非楚之福也。と云ひしか如き。佛肸公山不狃の徒。孔子を招きしか如き。孔子の如何に當時に重せられしかを見るに足れり。

之を要するに。孔子の志や遠く。其想や深し。故に之をして一朝經綸を施設す可きの地位を得せしめなば。文王周公の業を復し。唐虞三代の制度を折衷し。永久强固なる國家を建設したりしならん。而して此事や唯た一時の民情時勢を利用して。富强を圖り。僅に覇を一方に稱し。威を諸侯に示すを以て。恬々自ら喜ひ。瞿々自ら誇り。一代の衰運を回へし。億兆の頽俗を振ひ不拔の基を建て。太平の基を開けり。

退隱時期

孔子六十四歳にして國に歸りしも。魯終に孔子を用ひさりし。孔子此に於て野に退隱し。益々門人を招きて之を敎育し。六經を修めて之を後世に垂れたり。施設時期は孔子か現時に對したるの事業にして。退隱時期は孔子か將來に對したるの事業なり。

六經とは詩、書、禮、樂、易、春秋、是れなり。詩に風雅頌あり。列國民間の歌謠にして。民俗の邪、正、風化、得失、を觀るに足るへき者是を風とす。風に正變あり。周南召南は。周初周公旦召公奭か。文王の化を承

けて分流したるの國にして。民俗最も美なり。故に歌謠に發するもの亦皆性情の正を得。之を四方に被らしむる時は。以て其俗を化するに足れり。故に之を正風とす。而して邶、鄘、衛、鄭、齊、魏、唐、秦、陳、檜、曹、十一國に至りては。或は淫靡に流れ。或は忼厲に過きて。其中を失し。政敎の責あるものをして。觀て以て警誡せしむるに足れり。故に之を變風とす。雅に大小あり。小雅は列國の士太夫互に相唱和するものにして。或は和樂愷悌。或は悲傷憂憤。皆時世の變と士太夫の志とを觀るに足れり。代雅は周祖宗の功烈を歌ふて。天に告けたるものにして。周代天の思想は特に大雅に於て之を觀るへし。頌は祖宗の德を頌して。宗廟に祀りたる者なり。而して頌に周頌あり。商頌あり。魯頌あり。蓋し孔子の時。古詩三千餘篇ありしを而して孔子之を削りて。三百篇となせしなり。

書は史なり。夏殷周の三代各左右史官を置きて。國家の大事を記す。而して左史は事を記し。右史は言を記す。書は卽ち右史の記す所なり。故に上より下に告るの辭としては。誓誥の文あり。後世の所謂詔勅なり。下より上に告るの辭としては。諫誡の文あり。後世の所謂奏議なり。而して堯舜二典の如き間々紀事を雜へたるものは史官の加へたる所なるへし。然るに孔子書を錄する。上は唐虞に始まりて。下は秦繆に至り。凡そ治國平天下の模範となす可きものは。傳へて以て其徒に授けたり。故に其書を稱して虞書、夏書、商書、周書、四代の書とするなり。

禮は卽ち周禮儀禮なり。孔子の時周室衰へて。禮樂多く亡缺すと雖も。周の制法に係れは。大體に於ては猶ほ孔子の時に行はれたりし。而して其制作の意を識るものに至りては甚た少し。是れ孔

孔子十翼

子禮記を述へて二禮の意を說明したる所以なりし。蓋し周禮三百六十官の官職を記したるのみにして。周の官制たるに過ぎざるか如しと雖も三百六十官の掌る所は。一として吉、凶、軍、賓、嘉、五禮に關せざるはなし。故に儀禮ありて吉、凶、軍、賓、嘉、五禮の明文を記すと雖も。三百六十官の官職を知らされば之を施行するの方法を明にする能はず。是れ周禮を以て禮の綱とし。儀禮を以て目とする所以なり。而して禮記には勿論二禮を總說せられたり。樂に至りては音聲として存し。文字として存するものにあらず。故に禮經ありて樂經なし。然れとも孔子か樂を論したるは。卽ち樂記にして禮記の中にあるなり。

易は伏羲始めて八卦を畫し。文王之を重ねて。六十四卦となし。卦辭を作りしか。孔子十翼を述へて。其意を發明したり十翼とは上

彖、下彖、上象、下象、上繫、下繫、文言、序卦、說卦、雜卦にして種々の方面より易を說きて殆と盡さゝる所なし。故に孔子の十翼なかりせは恐くは後人易の微旨を窺ふこと能はさりしならん。而して孔子晩にして易を好み。之を讀んて手、卷を釋かす。韋編三絕するに至り。歎て曰く假我數年學易。可以無大過矣。と亦た孔子か如何に易に於て潛心研究したるかを見る可し。

第七章　漢族文化の發達に對する有形上の敵

凡そ世界人類の歷史は。優等人種か劣等人種を征服し。又劣等人種か。優等人種を征服するの事より着眼す可きはなし。昔し羅馬

帝國か。ゴール、ブリトン、ジェルマン種族を征服したるは。是れ卽ち優等人種か。劣等人種を征服したる者にして。其結果は優等人種の文化か劣等人種の間に波及する。恰も猶ほ美穀の種子を新拓の地に蒔くか如く。實に人類の爲めに非常なる幸福を增進せり。反之漢族か歷代數千年間。其北方なる夷狄種族の爲めに屢々侵入せられて。元朝清朝の如く。全く北方種族の爲めに統一せられたる者は。是れ優等人種か。劣等人種の爲めに征服せられたるの一例なり。

然らは北方種族は。漢族文化發達の爲めには實に破壞の一大强敵なりと云はさるを得す。而して漢族は如何にして。此强敵に對して善く其種族の生存を保護したるか。如何にして善く其文化の發達を保護したるか。如何ゝして善く其拜自然教の精神を保

護したるか。蓋し之を研究するは。支那史上一大緊要の問題なる可し。今乞ふ其大略を擧けて左に論せん。

支那は太古より異種族に依りて圍繞せられたり。卽ち東夷。北狄。西戎。南蠻。是れなり。然るに漢族か東北より西南に向て蔓延するや。其西南には殊に支那古代の工人たる苗ありて。往々漢族の南下を遮りたるは。唐虞の世或は三苗を三危に竄し。或は舜屬に命して三苗の亂を戡定せしめたるを以て。之を見る可し。支那人の所謂東夷。南蠻とは蓋し此苗族若くは漢族にして。苗族と雜居し。却て苗族の風に浸したる者を稱するならん。然れとも苗族の勢は。遂に大に猖獗なる能はずして止みたり。周世吳越楚の三國は。苗族の嘗て跋扈せし所なるを以て。之を蠻夷と擯斥したることありしも。其實漢族人種に外ならざるなり。

反之して北狄西戎と稱する者は。其勢古より族大にして。夏の時に獯鬻あり。殷の時に鬼方あり。周の時に玁狁あり。而して其種族。の內地に侵入する者。北戎。西戎。犬戎あり。之れ皆其風俗習慣の全く。漢族卽ち拜自然敎の信徒に異なりたるが故に。之を擯斥して禽獸に比したるなり。尙ほ希臘人が。野蠻を稱して人類以下の動物と思ひたると異ならず。然り而して此犬戎は周政の衰ふるに乘じて。益々內地に侵入し。遂に周の幽王を驪山の下に殺すに至れり。是に於て諸侯大に驚愕し。力を合せて之を掃はんとせしも。其力以て彼等を驅逐するに足らざりしが。齊の桓公に及て始めて之を掃て。以て中國を安するに至れり。若し當時桓公にして興らずんば。戎狄の禍は更に猖獗して。底止する所を知らざりしならん。故に孔子は管仲の功を稱して曰く。微管仲。吾其被髮左衽矣。

と云へり。

孔子の春秋を作るや。其目的は。內にして諸侯の跋扈を制して王室を尊はしめ。外にしては夷狄を掃て中國を安するにあり。然るも下て戰國に及て。七國內に爭ひ。干戈絕へず。兵禍止むことなかりしが爲めに。北狄の猖獗に注意する者少しと雖も。其實秦趙二國は北狄に境するを以て。其侵入を拒くが爲めに長城を築けり。殊に趙王は武靈王の如き雄略の主あり。胡服騎射して大に戎狄を退け。境を北方に開き。其後又は李牧の如き名將ありて。北邊を防ぎたるが。匈奴四十年間敢て侵入せざりしと云へり。然るに秦始皇六國を併呑して天下を統一するに方りては。遂に長城を築きて。西は臨洮(今の甘肅鞏昌府岷州)に起り。東は山海關に達し。山を越へ谷を跨り。其長さ凡七百里にして。凡そ五十間毎に城樓あ

り。秦の此長城を築くや。蓋し海内の人夫數十百万人を役し。其費用の廣大なること。擧て數ふ可らす。而して始皇の長子扶蘇蒙恬か軍十軍を監して。匈奴を壓したりと云へは。當時匈奴の勢既に中國と拮抗して相下らさりし。又以て見る可きなり要するに。孔子は春秋を作て。漢族を激勵し。以て戎狄を防かんとし。始皇は長城を築て戎狄を禦かんとす。而して兩者の目的は同一なりと云はさるを得す。

秦より以來。支那帝國の歷史は。若し漢族を以て南方人種とし。戎狄を以て北方人種とする時は。即ち是れ南北人種戰爭の歷史にあらさるはなし。抑も南北人種が。此の如く。數千年間。爭鬪したる者は。蓋し北方種族は古より其部族多く。其名稱又多からすと雖。彼等は第一拜自然教の信徒に依らす。加之に其地沙漠牧畜に適し

南北種族の比較

して耕作に適せす。故に其民慓悍勇猛。騎射に習ひ。戰鬪を樂て。平和の技術に達せす。社交の快樂を知らす。此を以て南北種族の性質は地を接して相隣するも關はらす。全く別人種をなせり。即ち南方種族は平和的の人民にして。北方種族は戰爭的の人民なり。南方種族は智力的の人民にして。北方種族は腕力的の人民なり。南北種族は秩序的の人民にして北方種族は破壞的の人民なり。南方種族は文明的の人民にして北方種族は野蠻的の人民なり。故に文化の進歩を以て之を論するときは。北方種族は固より劣等にして南方種族は優等なるも。民力の點よりして之を觀るときは。北方人種は強く南方人種は弱し。而して此の如く文化にして大に優劣ありて。武力に於て獨り之に反するの人種にして相接して居る。即ち鬪爭か絶へす兩者間に行るゝ。又自然の勢な

りと云はさるを得さるなり。

然るに漢の武帝は。文、景二帝の平和の餘を受け。富强の勢に乘して匈奴を征服するの志を起し。大に遠略を務め。北邊に向て兵を動せり。之に由て漢高祖を白登城に圍み。呂后に書を贈て之を慢侮したる匈奴も又々其羽翼を殺かれ。衛青霍去病等大軍に將として遠く沙漠を渡りたるか爲めに。匈奴北に遁れ漠南又匈奴の影を見さるに至れり。然るに下て後漢光武の時に至り。匈奴南北に分れ。其勢微弱に歸したるを以て遂に漢に下るに至れり。更に帝の世に至ては匈奴五十八部漢に下れり。西域五十餘國裏海の邊に至るまて。悉く漢に內附せり。是れ北方人種一時南方人種の爲めに征服せられたるの一例なり。

然るに匈奴の降附する者は漸く之を內地に雜居せしめ。殊に南

匈奴は其先世漢の甥なるを以て。劉氏と稱せしめて之を今の山西甘肅の地方に散布せしめたるを以て。魏の曹操に至りては其部族を分て五部となし。晉の武帝(司馬炎)左賢王の子劉淵を以て五部の帥となし。又鮮卑の族慕容部、拓跋部の上谷代郡の間に居らしめたり。是に於て晉室の衰ふるに乘して。是等戎狄の子孫內地に在るもの一時に起て兵を擧けたり。是を五胡雲擾の世とするなり。

若し漢族の勢力をして微弱ならしむれば。斯くの如く內地に雜居したる。北方種族の勢には遂に敵することを能はずして。生存競爭の場裏に蓋し又劣敗を取りしならん。然るに漢族の勢は。是等の種族を同化するの勢力ありて。未だ數十年を經ずして。宗教、政治、文學、政度、衣冠、悉く同化して。漢人と差別なからしむるに至れ

り。此を以て南北の朝。拓跋氏は北魏の朝を開きたるもの。全然たる漢族となれり。

五胡の風雲收まりて。南北朝となり。南北朝分裂すること二百年なりしか。隋に至りて。初めて海内一に歸し。唐又隋に代りて。天下統一の業を開き。吐蕃、回鶻、突厥、皆唐に歸服せさるはなし。而して其歸服するもの。唐悉く之を用ひて將帥となし。以て此邊を鎭したるを以て。玄宗の世に至りては。天下の猛將、精兵、皆此邊に集まりたるを以て。安祿山之を資して兵を興し。殆と唐室を傾覆せんとするに至れり。降て五代に至りては。後唐の石敬塘。契丹の兵を假りて齊を破りたるが爲めに。其報酬として幽薊等の十六州を割て之に與ふるに至れり。此に於て契丹内地に入て遼朝を開きたり。蓋し契丹の族は黑龍江の北に起りたる者なり。

然るに契丹の未だ衰へざるゝ。女眞の族又今の滿州に起り。漸く東南に向て侵入し。遂に内地に入りて宋を犯し。金朝を開くに至れり。

抑も契丹卽ち遼朝は。漢の時匈奴の勢强盛なりしが爲めに。沙漠の南北に住するの東胡種族。皆驅逐せられて是に移り。興安嶺山中に移住し部落をなせり。鮮微契丹の類これなり。然るに元魏の時自ら契丹と稱して。突厥回紇に服屬し。又唐に服屬せしか。五代の時阿保機に至り。始て帝と稱し諸部を糾合し。奚部を伐て其地を畧し。突厥、吐谷渾、黨項沙陀等の諸國を侵畧し。其子德光立つに及て。營、幷二州を蠶食せり。後晉の石敬塘。契丹の援を假りて。唐を亡したるの報酬として。幽薊等十六州を割て契丹に與へたり。是に於て契丹の版圖。西は沙漠以南蒙古の地より。直隸、山西、西北部

を有し。東は盛京、吉林二省より朝鮮の平安道に及べり。依りて其都を上京、中京、東京の三京に分てり。上京は蒙古に在り。東京は滿州に在り。而して中京は燕京に在り。五代の時。漢及唐皆朝貢を遼に納めしが。遂に勢に乘して宋を犯し。宋大に敗れ毎歲銀十万兩。絹二十万疋を入れて以て和睦を求めたり。然るに其後宋女眞連合して遼を攻たるを以て。遂に亡ひたり。遼宋と南北兩立すること。蓋し二百十年なりしなり。女眞、卽ち金朝は古の肅愼國にして。隋唐の時靺鞨と稱し。五代の時契丹に臣屬せしが。酋長完顏阿骨打雄才大略あり。遂に契丹に叛て兵を擧げ。契丹を攻めて渤海遼陽を併せ。又遼西を渡り五州を降し。初て號を立てゝ金朝と稱せり。此時宋既に遼の歲幣に苦みしを以て。連合同盟を金に約し。宋、金相合して遼を攻め。事成らば金は上京を取り。宋は中京を取らんと相約して共に兵を出せしが。宋軍利あらずして金軍獨り勝てり。然るに遼將張覺宋に降り。宋之を納れたりしを以て。金遂に同盟の約を破り。大軍を擧げて宋を犯し。汴京に至り宋をして金五百萬兩。銀五千萬兩。牛馬萬頭。帛百萬疋。及大原、中山、阿間、三路の地を割與するを條件として。媾和を許し軍を班せり。既にして金復宋を犯し。欽、徽二帝を挾て此に歸れり。此に於て宋江南に遷りて偏安の業をなせり。而して宋、金共に蒙古の亡す所となれり。

成吉思汗

然れども。遼陽金朝は猶言ふ可きあり。元朝(蒙古)清朝(滿州)に至ては。全く支那を統一し漢族を擧けて悉く其臣妾となす。其勢力亦偉大なりと謂つ可し。

元朝卽ち蒙古は。漠北興安嶺西韃靼の一部落にして。遼金に屬せしか。鐵木眞出るに及て。韃靼人諸部を征服して。帝を斡難河畔に

稱し。自ら號して成吉思汗と曰ふ。猶ほ王中の王と云ふか如し。時に宗の寧宗開禧二年なり。是より金を侵して。十八路の路を取り。西西遼を侵して天山南北の諸城を取り。波斯印度を侵し西夏を滅して。一大帝國を中央亞細亞に建設したり。是を元大祖とす。大祖版圖を三分して。長子朮赤を阿羅思に封して。欽察國と稱し。二子察哈台を土耳其斯坦に封して。察哈台の國と稱し。三子窩濶台を本國蒙古及金遼の侵地に封せり。是を太宗とす。太宗の宋と約し金を滅して其地を取り。清朝卽ち女眞は滿州長白山の北より起り。愛親覺羅氏は一部落の酋長たるに過きさりしか。弩兒哈赤に至り兵を起して遠近を威服し。同族諸部を糾合して國を滿州と號し。明と釁端を開き連年戰止まず。遂に之を破りて都を瀋陽に建てたり。是を太祖とす。太祖殂して皇太極位を嗣く。是を太宗

とす。太宗國號を改めて大清と曰ひ。朝鮮を攻めて之を降し。明の錦州を陷れ。疆土を拓く日に廣く。勢を得る日に熾んなり。太宗殂して世祖位を嗣きたり。是時明朝既に流賊李自成の爲めに亡ぼされ。遺臣吳三桂來りて援を乞ふたるを以て。大軍を驅り山海關を踰へて。李自成を伐ちて。之に克ち。遂に南京を攻めて福王を逐ひ。鼎を燕京に定めて全く支那を統一したり。

南北種族の競爭よりして支那四千年間の歷史を觀るに。北方種族の猖獗は。周の中世に始まれり。彼れ幽王犬戎の爲めに驪山の下に殺され。戎馬四郊に滿ちたるは如何ゝ海內列國をして震駭せしめたるを想ふ可し。是を北狄種族の侵入尤も大なる者とす。秦の始皇亡び秦者胡也と云ふを誤解し。北胡匈奴の謂ひなりとし。海內の力を傾て長城を築き。精銳十萬を以て扶蘇、蒙恬に附し

て北邊を駐防せしは。如何に當時匈奴の勢熾んなりしかを想ふ可し。漢高祖項羽を亡ぼして海内を統一せしも。匈奴の爲めに白登城に圍まれ。僅に陳平の奇計を以て其難を脱するを得しは。如何に匈奴の強くして漢の弱かりしを見る可し。然るに孝武帝文景豐富の後を承けて遠略を事とし。大に匈奴を攘つて。漠南王庭なからしめたるは。是を南方種族を以て北方種族に勝ちたるの第一次とす。然るに其後に及んで。匈奴漢に降附し。漢之を内地に雜居せしめたるの結果として。晋に至りては五胡雲擾の亂を作し。拓跋魏鮮卑の族を以て北朝を建てたるは。是を北方種族支那に入りて割據したるの始めとす。然るに隋唐南北の分裂を統一し。唐太宗不世出の大才雄略を以て。回紇、突厥を征服し地を西北に招き。高昌吐蕭をして内附せしめたるものは。是を南方種族を以て北方種族に勝ちたるの第二次とす。

五代より宋に至りて。契丹女眞彼が如く支那に入りて遼金二朝を立てたるものは。是を北方種族支那に入りて割據したるの第三次とす。而して。元の宋を亡し清の明に代りたるものは。是を北方種族全く南方種族を征服したる者とす。

然れども。今北方種族か南方種族を征服し。其地に入りて。或は之に割據し。或は之れを統一したるの結果如何を見るに。盡く是れ北方種族か南方種族に同化せられたるの歴史なり。彼れ五胡の族劉淵、石勒、符堅、姚興の如き。皆支那の文學に通じ。習俗に化せられて。純然たる漢族と夷狄たるを恥るの風ありしなり。遼、金兩朝の如きに至りては。其内地に據りて稍〻割據するの久き歳月と共に。胡俗を脱して漢俗となり。制度、文物、言語、文字、宮室、衣冠、風俗、

習慣、盡く漢化せられ。再ひ國俗に復せんと欲するも得へからさるに至れり。左れは金の世宗か宰相に向て。

朕嘗見女眞風俗。迄今不忘。今之燕飲音樂。皆習漢風。非朕心所好。東宮不知女眞風俗第。以朕故尙存之。恐異日一變。此風非長久之計也。

第八章　漢族の文化に對する無形上の敵

拜自然教は漢族をして崇拜せしむるの點より言ふとき宗教なり。漢族をして進歩せしむるの點より言ふときは文化なり。而して此宗教の信念此文化の進歩か。堯舜以來今日に至る迄。四千年

間の久きを歷て變壞せさりしものは。一は人種の繼續に由り。他は思想の繼續に由らすんはあらす。歐州歷史に於て基督教は東方亞細亞より西漸して羅馬帝國に入り。歐洲古今の文化を殆と一變したり。故に歐洲人種若し羅馬帝國以前の文化を維持せんとしたりしならは。基督教を以て必ずや我文化を變壞する無形上の敵と見做したりしならん。

吾人は既に北方種族の侵入を以て。漢族文化の發達する有形上の敵として之を見たり。然るに生存競爭の勢力に於て。漢族は强く北狄は弱かりけん。漢族文化の發達は之か爲めに益く範圍を擴張したるも。少しも變壞せられたるを見さりし。而して漢族文化の發達に對する無形上の敵は卽佛教ならさる可らす。

佛者の眼を以て之を見るときは。印度佛教の東漸は大に支那の

文化を援けて發達せしめたりとこそ言はん。然るに今や吾人佛教を以て漢族文化の發達に對する無形上の敵とするに至りては吾人或は佛者の詰難を受けんも知るべからずと雖も吾人は敢て茲に佛教其者の眞理非眞理を論評するにはあらず。唯た漢族文化の大本たる拜自然教と佛教とは根本的思想に於て相容れざれさるものあるを知るなり。既に根本的思想に於て相容れざれは佛教か東漸して勢力を得ると同時に拜自然教は勢力を失して漢族固有の文化は之か爲めに變壞せらる可きは理の覩易きものにして固より論を待たず。是れ吾人か佛教を以て漢族文化の發達を變壞するの敵と見做したる所以のみ。然らは吾人の意は佛教を以て一般文化の敵とするにあらずして獨り漢族に屬する一種特別なる文化の敵とするにあること辯を費さすして

自ら明かならん。

印度佛教は東漸以來如何なる勢力を漢族文化に及ほしたる乎是れ吾人か將に歷史上の事實に就て討究せんとの一大問題のみ。而して吾人此問題を解釋せんか爲めに表裡二面の觀察を下たす可し。

表面上の觀察

印度佛教の始めて支那に入りしは後漢明帝の時に在り。卽ち迦葉摩騰、竺法蘭二人は優塡王の造る所の佛像及び四十二章經を携へ。西域より遙に洛陽に來れり。明帝之を迎へて白馬寺に居らしめ。梵經を翻譯して万民に示したり。是時漢族は如何なる思想を以て果して佛教を見たりしか乎。袁宏の漢紀を見れば盖し其概を知るに足るものあらん。

西域天竺有佛道焉。漢言覺將覺悟群生也。其敎以修善慈心爲主。不殺生專務清淨。其精者號爲沙門。漢言息心。蓋息意去欲而歸於無爲也。又以爲人死精神不滅。隨復受形。生時所行善惡皆有報應。故所貴行善修道。以鍊精神不已。以至無爲而得爲佛也。佛身長一丈六尺。黃金頂中佩日月光。變化無方。無所不入。故能化通萬物。而大濟群生。初明帝夢見金人。長大頂有日月光。以問群臣。或曰西方有神。其名曰佛。其形長大。因遣使天竺問其道術。圖其形像而還。有經數千卷。以虛無爲宗。包羅精粗。無所不統。善爲宏闊遠大之言。所求在一體之內。所明在視聽之外。世俗之人。或以爲虛誕。然歸於玄微深遠。難得而測。故王公大人觀死生報應之際。莫不瞿然而自失焉。

支那戰國の末より秦漢に至りて後世道の祖たる方士。道士の一派あり。海上に蓬萊。方丈。瀛洲の三神山ありて。神仙之に住し。黃金丹砂を鍊るときは。不老不死の藥を得べし。五嶽に封禪するときは。眞人を招くべしと。種々妄誕說を唱へて秦皇漢武の如き君主を誑惑せしかども。未だ有形世界を離れたる不生不滅の靈躰を說かざりし。又未來世界の存在を說かざりし。故を以て道敎は儒敎とは大に其趣を異にするも。亦た是れ拜自然敎以外の異元素に非ざるなり。清朝の碩儒顧炎武は。宋玉が招魂賦を鋪張したるものに過ぎるなりと說をなすど雖も。佛敎の東漸以前に漢族に天堂地嶽の思想はなかりしなり。

然れども佛敎は東漢より魏晉六朝を經て。隋唐に至るまでに。如何に隆盛に赴きたりしかは。單に表面上の觀察をなすものに在りては驚く可きものあらん。今此數百年間の久しきに於ける。佛

道進歩の情況を叙するは。一部の佛教史を編纂するにあらされば能はさるを以て。此に唯だ事實の著大なるものを擇むで。隆盛の觀を示さんとす。

後漢明帝の時より。東晉五胡の世に至まで大約三百年なりとす。而して支那佛教の盛は。五胡南北朝の際に若くはなし。

後趙石勒。兵を起して襄國に據る十五年。暴政を以て其民に臨みしが。天竺の僧佛圖澄洛陽に至るに及んで。國を以て之に事へ一大事を施行する毎に。圖澄に諮さるはなし。石勒死し其弟季龍位を嗣ぎ益〻佛圖澄を重し。衣するに綾錦を以てし。乘するに雕輦を以てし。拜して國師となす。凡そ圖澄の度する所の弟子數千人の夥しきに及びたり。前秦符堅長安に據り。兵威を以て疆土を拓き。其國。東は東海を極め。西は龜茲を併せ。南は襄陽を包み。北は沙漠

を盡して。意驕り志滿ち自ら以て天下に敵なしとせしも。獨り佛圖澄の弟子沙門道安に事ふると尤も謹めり。初め堅の襄陽を取るや左右に謂て曰く。吾十萬の師を以て襄陽を取りて得る所は只一人半あるのみ。道安は一人にして鑒習齒は半人なりと。而して堅の兄符朗書二十篇を著はして符子と曰ひ。大に佛教を頌贊したり。前秦の佛教を崇尚したるや此の如くなりし也。後秦姚興は父姚萇の業を繼で關中に都し。龜茲國の沙門鳩摩羅什を尊敬して國師となし。羅什をして經論を譯せしめ。僧尼を度することと數千萬。而して前後秦兩朝譯出する所の經論は三藏(經律論)百餘卷の夥きに達したり。豈に盛んなりと謂はさる可んや。

元魏孝文帝已來僧侶を度する二百萬。寺院を建る三萬餘寺。赤金十萬斤。黃金六百斤を用ひて釋尊の像を鑄り。其建立する所の永

寧寺の七級浮圖高さ三百餘尺。翻譯する所の經論一千餘卷。印度、西藏の沙門風を慕ふて來るもの前後三千人。一國の男女稍〻文字あるものは爭ふて僧尼となるを以て。太和十六年には詔を下して。大州は僧尼二百人を度し。中州は五十人を度し。下州は二十人を度するの制限を立つるに至れり。梁の武帝は卽位の時道俗二萬餘人を率ゐて重雲殿に登り。永く道敎を棄てゝ佛敎に歸依するの誓願を發し。太子、諸王、公卿、道俗一時授戒するもの四萬八千人に及び。前後身を捨るもの三回にして。群臣の爲めに錢一億萬を以て贖はれて宮中に歸れり。是れ亦た南朝(梁)の國を傾けて佛敎に奉ずる。北朝(魏)に遜らずと謂つ可し。

要するに。五胡南北朝は疆域の狹小なるにも關はらず。其浮圖を築き其僧尼に奉するに至りては。國人を傾けて敢て顧みず。佛事を以て朝廷の大典とし。僧尼寺院の多きを以て邦家の文明を表するとし。海內を二分するの魏にして。一國人口の三百万人か僧尼たるに至りては。國家衰亡せさらんと欲すと雖も得んや。世の佛者か所謂佛敎三武の禍なるものは。顧ふに極盛の反動たるに過きさるのみ。

隋朝海內を統一するに迄んで佛敎を崇尙する。南、北兩朝の盛なるに及ばすと雖も。高祖僧尼を度する三十萬人。寺院を建つると五千宇。譯者二十四人を置て。經論五百卷を譯出せしめたり。唐に至りては僧尼を度し寺院を建つるは。又隋朝の盛なるに如かず。一と雖。玄奘三藏の翻譯する所の經、論千三百三十五卷にして。其他一中外の高僧名德を優禮するに至りては。決して前代の及はざる所なり。而して佛敎東漸以來唐に至るまで。五百年間の歲月を經

過し。盛の極に達したると謂ふ可し。

今佛教各宗の東晉より隋唐に至るまでの間に興りたる事跡を擧れば。鳩摩羅什は三論宗、及成實宗を弘め曇無讖は北京に來りて涅槃宗を開き。曇鸞は東魏に在りて淨土宗を開き。梁武帝の時達摩は印度より來りて禪宗を開き。隋に於ては智顗天台宗を開き。唐に於ては玄奘法相宗を開き。善導は淨土宗を興し。賢宗は華嚴宗を唱へ。金剛智、善無畏、不空の三三藏は眞言宗を傳へたり。而して支那、高麗及び我邦に東漸したる大乘各宗は。大抵此際に樹立せざるはなし。

五代及び宋に至りては。佛教の盛遠く隋唐に如かずと雖ども。元朝に至りては。世祖蒙古の漢族を以て大に佛教を尊崇し。順帝に至りては。西蕃の僧を優待し。終に僧侶の爲めに其國を亡ぼしたるは殆ど梁武と異なるとなし。明太祖漢族を以て蒙古を漠北に驅逐し。衣服、冠、制度悉く中國の舊に復したるも。猶ほ佛教、道教、儒教を以て國教と立てたるは。當時佛教が既に如何に勢力を得たるかを見る可し。清朝に至りては。元、明兩朝の如く佛教を信奉せずと雖ども。崇尚の意に至りては更に衰へざるなり。

凡そ佛教が。後漢以來、支那帝國に東漸したるの歷史は、此の如し。故に表面上の事實に就て之を觀るときは。佛教が漢族に十分なる勢力を有したりと謂ばさる可からず。其佛教が勢力を有したる丈。之と根本的の思想に於て並立せざるの拜自然教は勢力を失はざる可からず。然り而して佛教東漸の爲めに。漢族固有の文化は更に變壞せざるものは何乎。是れ進んで裡面的の觀察を要する所以なり。

裏面的觀察

表面的觀察は此の如し。更に一轉して裏面的觀察をなさんか。佛教が東漸以來支那に於て變化を受けたるの諸點は左の如し。

第一。小乘は衰へて大乘は盛となれり。彼れ後漢の明帝の時。摩騰、法蘭の二人が印度より携へて。中國に入りたるの四十二章經は。小乘教にして大乘教にあらざるなり。然るに。其後東漸する所の佛教は。多くは是れ大乘にして小乘は六朝に至りて俱舍、成實の二宗興りしと雖も。其勢微々として振はず。而して支那は彼の錫嵜、暹羅、緬甸、安南等の南方小乘國に反して大乘國となれり。是れ其故何ぞや。

抑も小乘は其教理、其儀式、其戒律、確然一定して動かす可からず。之に對して。大乘は其寛容する所廣し。其包括する所大なり。故に

如何なる國民の中にも融通することを得可し。而して漢族の如きは。元來根本的の思想に於て佛教と相容れさる。拜自然教の信徒なり。然るに小乘を以て漢族の間に行はしめんと欲すれは。教理に於て。儀式に於て。固有の思想、感情、風俗、習慣と反對する者甚だ多くして。終に氷炭相容れさるに終らんのみ。是豈に大乘佛教が獨り支那に盛にして。小乘が衰へたりし所以にあらずや。

第二。大乘佛教は支那に盛なりしも。漢族文化の勢に讓歩したり。此讓歩は。魏晉以來佛教は道教と屢〻相衝突して。其爭の激するや水火の如くなりしも。未だ佛教が一回も儒教を排したるを聞かず。是れ佛教は現世の事を以て之を儒教に讓りたるにあらずや。夫れ鳩摩羅什。菩提達摩の如きは元來印度人なり。支那人にして佛教の爲めに渡天したるものは。前後數十百人の多きに達す

と雖も。其印度にあるや尤も久しく。其佛教を究むるや最も精しくして。歸國の後大に佛教を擴張するの功を奏したるものは。唯だ唐朝三藏の一人ありしのみ。玄奘の大唐西域記に曰く。

贍部洲地有二四主一焉。南象主。則暑宜二象一。西寶主。乃臨二海盈一寶。北馬主。寒到宜二馬一。東人主。和暢多二人一。故象主之國。躁烈篤學特閑二異術一。服則橫巾右袒。首則中髻四垂。族類邑居。室宇重二閣一。法主之鄉無二禮義一。重二財賄一。短製左衽。斷二髮長一髭。有二城郭之居一。務二殖貨之利一。馬主之俗。天資獷暴。情忍二殺戮一。毳帳穹廬。鳥居逐牧。人主之地。風俗機惠。仁義照明。冠帶右衽。車服有二序一。安二土重一。遷務資二有類一。三主之俗。東方爲二上一。其居室則東闢二其戶一。且日則東向以拜。人主之地。南面爲二尊一。方俗殊風。斯其大槩。至二於君臣上下之禮一。憲二章文軌之儀一。人主之地無二以加一也。清心釋累之訓。出二離死生之教一。象主之國。其理優矣。

又義淨三藏の南海寄歸傳に曰く

至二如一神州之地一。禮教盛行。敬二事君親一。尊二讓耆長一。廉素讓順。義而後取。孝子忠臣。謹二身節一。用皇上則育二兆庶一。納隍軫慮於明發。群臣則莫不拱手。履二薄氷一。呈二志於通宵一。或時大啓二三乘一。廣開二百座一。布二制底於八澤一。有識者咸悉歸二心一。散二伽藍於九宇一。迷途者並皆迴向。皇皇焉。農歌畎畝之中。濟濟焉。商詠二舟車之上一。遂使二鷄貴象尊之國一。頓二類丹墀一。金鱗玉嶺之鄉。投二誠碧砌一。爲二無爲事一。無事斯固無二以加一也。

二人は支那佛教の泰斗なり。而して人倫の教。禮義の俗に至りては。皆な印度を以て支那に及はずとし。佛教を以て儒教に如かずとす。支那に於ける佛教の讓歩是に於て見るへし。若し此讓歩なかりせば。佛教豈に東漸するを得んや。

第三、支那佛教は、現世的となれり。夫れ不生不滅の靈体を以て眞

實とし。現世界を以て虛假するものは。大乘、小乘に論なく。是れ印度佛敎の本旨なり。然るに陳(南北朝)の眞諦三藏一たび起信論を起して。眞如緣起の說を唱ふるに及んで。眞、妄和合。眞、假不一を以て根本とする天台、華嚴の兩宗初めて起り。支那佛敎は殆んど之が爲めに一變するに至れり。此に於て大乘敎の極めて發達したりしものは。却て未來よりも現世を重ずるの傾向を生し。厭世的の佛敎は又變して樂世敎たるの傾向を生ずるに至れり。是れ佛敎が支那に於ける順應の尤も大なるものにして。豈に佛敎の漢族固有の思想に同化せられたる一端として見る可からざるか。第四佛敎は支那に於て祖先敎の一種となれり。夫れ儒敎は父母祖先の靈を重んし。喪祭を以て五禮の一とす。而して父母歿するときは三年の喪を服し。父母の忌日に遇へば肉を食せず。酒を飲まず。以て哀傷の意を表せり。然るに佛敎の支那に入りしより。不飲酒、不食肉の清淨持戒は。儒敎の喪忌と正さに投合し。縱令佛敎を信せざるものと雖とも。此の點に於て投合するものあるを以て。僧を延き經を誦するの習慣をなして。儒、佛二敎期せずして一致するに至れり。而して佛敎の勢力は倍々盛なり。是れ佛敎支那に於て祖先敎の一種となりたるものなりと謂はざるを得ざるなり。

第五、隋唐以來歷朝の佛敎崇尙は、半ば、政畧となれり。世人以爲らく。支那を統一したるの帝國に於て佛敎の盛大を極めしは唐にして。大宗、高宗、玄宗、肅宗、代宗中外の名僧大德を優寵し。堂塔伽藍を建築したるは。是れ皆三寶に歸依したるに外ならざる也と。然とも唐朝は。獨り佛敎を保護したるのみならず。併せて突厥、波斯

より東漸したる。基督教、回々教をも崇尚し。長安の都をして世界各宗教の中心たらしめ。一は以て唐家一統の偉觀を示めし。一は以て夷狄を駕馭するの術とせり。今の清朝が喇嘛教を尊崇するも。亦た依りて蒙古、伊犂、西藏の佛教種族の歡心を得るの方便にあらざるはなし。然らば隋唐以來。歷朝が佛教を崇尚したるものは政略に出づるもの多きを知る可し。

以上の各件を綜合して之を見るときは。印度佛教は表面の盛なるに比例して。裡面漢族の文化に影響を及ぼしたるの勢力は甚だ微弱なるを知る可きなり。然らば無形上の敵も有形上の敵と同しく。亦た漢族文化の發達を變壞すること能はさりしなり。

吾人は以上研究したる歷史の結果に依りて。支那帝國の將來を論せんと欲するなり。抑も歷史は徒らに過去の事實を研究するを以て目的とするものにあらず。必ずや其既に研究したるの事實中に於て。一國發達の大傾向なるものを認め。此大傾向をして將來の運命に關する問題を解釋するにあり。是れ吾人が歷史研究の方針とする所なり。

支那帝國は果して將來に於て如何なる變動を見る可きか。今日の現況にありて將來の趨勢を推すときは固より左の數問を出でさる可し。

第九章　支那帝國の將來

第一　歐洲文明の進入

支那帝國は歐洲文化の進入に對しては。何如なる影響を受く可

きか。此問題を解釋せんと欲せば。先づ所謂歐洲の文化なるものを分析して其要素を査檢せざる可からず。而して歐洲の文化と稱するものゝ內には。固より基督敎をも包含す可し。

抑も基督敎が支那に始めて進入したるは。上章に言へるか如く遠く唐朝に在り。然れども此時の基督敎なるものは。終に佛敎諸宗と勢力を競ふこと能はずして中止したり。卽ち其後支那に輸入したるものは天主敎にして。天主敎(ゼスユイト)派を代表して。東洋布敎の爲めに支那に來りたる。彼のリシマテオ卽ち利瑪竇は萬曆年間を以て明に入り。北京に於て止まること十餘年。大に佛敎を排して天主敎の眞理を主張したり。是に於て士太夫天主敎を稱して天學となし。一時靡然として其敎を遵奉せしかば。佛敎の徒大に之れを忌み。佛耶兩敎の衝突は明末の一奇觀を添へ

たり。然るに當時士太夫が天學を崇尙せしは。其實天主敎の敎理に感服したるよりも。利瑪竇及び其の徒の天文地理の學に感服したるに職由せり。徐光啓の如きは尤も天學崇尙の一人なるにも拘はらず。其佛老二敎を排して天主敎を取りたるものは。天堂地獄の說に感服したるにあらずして。天主敎の道德當時支那の衰頽せる風化を振興すべしと信じたるに職由せり。今徐光啓が天主敎を留むるの奏議を擧けて之れを明証せんに。

臣嘗論古來帝王之賞罰。聖賢之是非。皆範人於善。禁人於惡。至詳極備。然賞罰是非。能及人之外行。不能及人之中情。又如司馬遷所云。顏回之夭。盜跖之壽。使人疑於善惡之無報。是以防範愈嚴。欺詐愈甚。一法立百弊生。空有原始之心。恨無必治之術。於是假釋氏之說以輔之。其言善惡之報在身後。則外行中情。顏回盜跖似乎皆得

其報。謂宜使人爲善去惡不旋踵矣。奈何佛教東來一千八百年。而世道人心不能改易。則其言似是而非也。說禪宗者衍老莊之旨。幽藐而無當。行瑜伽者雜符籙之法。乖謬而無理。且欲抗佛而加於上帝之上。則與古聖賢之旨悖矣。使人何所適從。何所依據乎。必欲使人盡爲善。則諸陪臣所傳事天之學。眞可以補益王化。左右儒術。救正佛法者也。蓋彼西洋隣近三十餘國。奉行此教千數百年以至於今。大小相邺。上下相安。其久安長治如此。然有擧國之人。兢兢業業。惟恐失墜獲罪於天主。則其法實能使人爲善。亦既彰明較著矣。此等教化風俗雖諸臣所自言。然臣審其議論。察其圖書。參互考稽。悉皆不妄。臣聞田余西戎之舊臣。佐秦興霸。金日磾西域之世子。爲漢名卿。苟利於國。遠近何論焉。又伏見梵刹琳宮遍布海內。番僧喇嘛。時至中國。卽如回回一教。並無傳譯經典可爲證據。累朝以來包荒容納。禮拜之寺所在有之。高皇帝命翰林臣季翀矣伯宗。與回回大司馬何赤黑哈嘛等。譯曆法。至稱爲乾方先聖之書。此見先朝聖意深願化民成俗。是以應表搜揭不遺遠外。而釋道諸家道術未純。教法未備。二百五十年來猶未能仰稱皇朝表章之盛心。若以崇奉佛老者崇奉上帝。以容納僧衆者容納陪臣。則興化致理。必出唐虞三代上矣。

明代支那の上流社會が。天主教を視ること此の如し。而して天主教の目的は。此の如く現世的にあらざるなり。此に於て利瑪竇は北京城內に宏大なる天主堂を賜ふて。頗る朝廷より優寵を受けしも。明朝の亡滅とゝもに一時其教は中止せり。是に由て之を觀れば。淸朝以前天主教の支那に於ける歷史は甚だ短きにも拘はらず。佛教と同しく到底漢族文化の發達を變壞するの勢力なき

や明なり。

且つ夫れ利瑪竇は支那天主教の信徒なり。祖先教の到底除き難きを知て之を許したりと言ふを以て。大に羅馬の攻擊を受けしにあらずや。而して今や支那帝國に於ける天主教信徒の數は既に百万の多きに達す。多くは是れ無智不學の人民にして。支那一般の社會に勢力を及ぼすを見ず。此後天主教、基督教にして。如何なる多數の信徒を支那に得るも。吾人は漢族文化の發達を變改するの勢力なきを知るなり。

然らば宗教以外。歐洲文明の進歩なる者は果して何を意とするか。蓋し科學の進歩、機械の發明、物質の改良に外ならざる可し。而して此三つの者は果して相容るゝや否やと云ふに。吾人は倍々其漢族固有の文化を助くるも。之を壞るの結果あるを見さるなり。

歐洲科學の進歩は。明末、清初既に曆術として採用せられたり。又火器の如きも明末既に佛朗機の名を以て採用せられたり。又數學の如きは曆法と共に支那に採用せられて。中西兩法並びに講究せられたり。而して此他歐洲諸學術即ち法、文、理、醫の四科が支那に入りたるは。長髮賊以後の事なりし。今日に至りては北京に同文館あり。廣東に廣方言館あり。天津に武備學堂あり。是れ皆な歐洲の新科學を攻究するの目的を以て建設せられたるに非さるはなし。而して曾國藩が學藝を習はしめんが爲めに。人才を擇んで歐米各國に留學せしむるの奏議一たひ許可せられてより。清國人にして歐米に留學し。其學藝に通達し。其文化を稱賛して之を自國に輸入せんと。現に盡力しつゝあるもの幾十百人なる

を知らず。特に陸、海軍軍備の如きは。長髮賊以來歐洲に摸倣し。砲臺を築き。艦隊を造り。軍隊を錬り。不幸にして日清戰爭に遭遇し十有余年の久しきを經て拮据經營したるもの。一朝にして破壞せられたるも。戰後の今日。清國は益々歐洲の兵器軍制を摸倣するに汲々たり。而して歐洲の兵法の毫も支那文化と衝突するの點を見さるなり。若し夫れ鐵道電信の布設の如きに至りては。今日清國が急務中の急とするものにして。清國の之が爲めに無限なる利益を享くるも。毫も之れが爲めに支那固有の文化を破壞せらるゝの恐あるを見さるなり。此他經濟機關即ち銀行の設立貨幣の制度の如きは清國が如何に歐洲の文化を輸入するも。是亦漢族固有の文化を破壞するものにあらさるなり。

曾國藩は長髮賊平定の後八事を以て朝廷に上奏して曰く。第一

國郡を中央に移べし。第二文弱の風を一掃して尙武の氣風を起すべし。第三軍制を改革し兵馬の權を以て中央に集むべし。第四財政を改革して其權を中央政府に收むる可し。第五擧科の法を一變し士をして虛文を措て實用の學を講せしむ可し。第六海陸の國防を修むべし。第七運輸交通の便を開く可し。第八青年を歐米に留學して諸工藝を習はしむべしと。嗚呼是れ曾國藩が三十年前に吐露したるの意見なり。而して今や此意見は滿朝の君臣をして時勢必要の逼り來ると共に。着々として實施せられさるはなし。抑も曾國藩が第七條の運輸交通の便を開くとは。顧ふに甚だ鐵道電線の布設を賭したるものにあらさるべし。然れども今日に方りて運輸交通の便を開くものは。鐵道電線の布設に如くはなし、若し鐵道電線にして果して蜘網の如く。四通八達全國に

布設せられたらんには運輸交通の便も固より言ふを待たず陸海の國防之に依りて完成を得可く兵馬財政の權中央に集まるを得可し而して國都の如き之を移すを要せざるなり。

此の如く論じ來れば歐洲の文化即ち科學の進歩機械の發明物質の改良は倍々支那固有の文化を助けて現事帝國の統一を固くし富强を進むるの結果を生せしむるのみにして支那帝國の爲めには實に無限鴻大なる利益を與ふるものなり但だ清國現今の科學法を改革し歐洲諸科學を以て之に代ふるが如きは頗る儒教の精神を破壞するの結果なきにあらざるかと疑を起すものあれども所謂科學法の改革なるものは只從來無用の虛文を廢し之に代ふるに歐洲實用の科學を以てするのみにして經學史學の如きは千古を經るとも決して變せざるの精神なれば

個人主義
家族主義

此科學法の改革の爲めに漢族固有の文化を變壞せざるが如きは毫も之れなかるべきなり。

若し夫れ歐洲の個人主義と支那の家族主義とは根本に於て相容れざるものなるを以て此個人主義を以て基礎とする佛國民法の如きは支那に於て其儘決して施行すべからざるものあらん若し萬一にも之を施行するに至れば支那國民の基礎たる家族制度は百年を出でずして漸々破壞せらるべし是れ將來漢族命運の懸る所なり。

第二清朝永久の維持

第十九世紀の今日は是れ優勝劣敗弱肉强食の世界なりと雖ども亦列國勢力の平衡法なるものありて其間に存し之が恩惠に因りて既に危きもの安すく將に顚れんとして却て維持せらる

ゝ者亦少からす。彼れ土耳其の如きは。數十年前既に半死半病の國なりと目せられたるにも拘はらすして。氣息奄々として猶ほ命脉を今日に繫くを得るものは。是れ豈に列國勢力平衡法の恩惠に賴るものにあらすや。然れは今日の清朝の如きは。既に其末路たること疑なきも。正に露、英競爭の中ゝ立ち。列國の干渉を受けつゝあれは。愛親覺羅氏の壽命は今後以外に長久ならんも未た知る可らさるなり。回顧すれは彼れ長髮賊の亂の如き。賊勢の猖獗すること十餘年の久しき十六省を蹂躪し。三百餘城を攻陷して終に平定に歸し。將に亡ひんとしたるの愛親覺羅氏再ひ起りたるものは。天命人心未た全く清朝を棄てさるの致す所にして。曾國藩、曾國筌、左宗棠、季鴻章、胡林翼、羅澤南、彭玉麟、季續賓等諸豪傑の力亦與りて力ありと雖も。外英佛の援ゝ由らすんはあら

清国の運命 第一好例

す。故に列國が干渉を清國に開きたるものは。却て愛親覺羅氏の命運をして意外に永からしめんも知るへからさるなり。日清戰爭の如きも亦然り。若し露、佛、獨の三國にして同盟せさりしならは。清國の運命は果して如何なりしか。

若し今の清朝にして。外は列國勢力平衡法の恩惠に賴り。內は科學の進歩、機械の發明、物質の改良に賴りて。支那帝國の富强と統一とを進むるあらは。外寇、內亂跡を絕ちて四億萬の生露は平和の澤に浴し。斯の如くにして數十年を經過するとを得ば。支那帝國は世界に於ける一大强國となり。國勢の振興は種族の蕃殖と共に盛ならんとす。而して歐洲の物質的進歩と。漢族の拜自然教とは互に相抱合して。一種斬新なる文化を第二十世紀の天地に現出せんとするなり。

第三　清露二國

支那帝國の將來の問題を決せんと欲せば。露國との關係最も重要なるべし。若し一朝今の愛親覺羅氏にして滅亡に歸し。支那帝國は之と共に政治上の獨立を失するあらば。七拾二萬方里の版圖。四億萬の生靈を擧けて露國の有に歸せんことは。或は吾人の夢想に止まらさる可し。然れども今日世界列國の一擧一動は。盡く列國勢力の平衡法によりて支配せらるゝを免れされば。露國が東洋併呑も。決して一朝一夕の間に其機會を得さる可し。是れ固より別問題に屬するなり。若し露國にして果して之れが機會あれは。露國は果して支那帝國を征服し得るや否や。又果して之を統治し得るや否や。此二個の問題は卽ち吾人が以上討索した る。歷史的研究の結果によりて十分に解釋し得可しと確信する

を以て。是より此方面に向て研究の歩を進むべし。

回顧すれば。彼れ金元兩朝が宋を併呑し。今の清朝が明を併呑したる。皆な數十百年の經營を歷て始めて併呑の目的を達したるものにして。決して一時戰爭の勝敗に由るものにあらざるなり。然るに露國と清朝との關係を見れば。大に金元兩朝と明朝との關係に類似するの點なきにあらず。支那人民が秦漢以來數千年間。北方種族の爲めに征服せられ。統治せられたるは。一大連續的の事實にして其命運は豫め定められたるものゝ如し。此點より見るも愛親覺羅氏に代て。四億萬の生靈を支配する者は。露國にあらさるか。黃龍の眼を攫んで之を墜すものは。猛鷲にあらさるかと想像せらるゝものあり。

今若し事實に依りて之を論すれば。露國が支那帝國の邊堺を蠶

伊犁條約

食して。內地を覬覦したるは一日よあらず。清朝咸豐八年卽ち千八百五十八年。露國は清國の內亂、外寇交々至るに乘して滿州黑龍江左岸の地數百里を蠶食し。又卡倫以外沿海の地數百里を讓受したり。是れ豈に金、元兩朝が始めて宋を覬覦したるの時に似ずや。亦露國が伊犁を煽動して叛を起さしめ。遂に清國と數年兵を構へて。殆んど清國の安危にも關係せんとするの定約を定結せんと欲したるは。是豈に遼金が宋の弱を侮り。之に迫りて宋朝の滅亡の命運を促したるの事に類せずや。然れども當時の清國廟堂、又其人あり。此定約を許さゝりしは是卽ち清國の幸なりと謂はざるを得ず。而して此定約は有名なる伊犁定約にして。遣露大使崇厚は之か爲めに喚び返されて斬監候に處せられ。此定約に反對したるの張之洞は忽ちにして今日勢力の地歩を作ると

を得たり。試に參考の爲めに當時の定約の草案及び張之洞之に反對するの奏議を左に揭けん。

●條約奏案

一從來伊犁、塔爾巴哈台、哈什噶爾三城の外に烏魯木齊等六ケ所よ於て。領事館を增設することを許す。

二露國人は關中秦隴を通行し。以て自由に漢口に往來することを得。

三松花江露人の行船を伯都斯城よ至り。沿江一帶隋處の居民と貿易することを得。

張之洞の以上條約に反對するの奏議

夫れ新約十八條なる者其最も謬れるものは。陸路通商嘉峪關より西安漢中を經て。直ちよ漢口に達するの一事に如く

は莫し。此約の如くせば我が秦隴の要害荆楚の上流は盡く俄人の據る所となり。互市場所在に支蔓すると日に大甚だしく。內國の消息は皆彼に通じて邊防の守禦は爲めに弛み。堂奧既に敵國の有となる。是を許す可からざる第一なり。

一東三省は國家の根本たり。伯都訥吉林精華の要地に向て。彼れ俄國が乘船來往の自由を許すときは。是れ東三省全境を擧げて彼の游行に任かすと異なる所なし。是れ敵を縱して我が肩背に入らしめ。神京に接迫せしむ。恰かも綏芬河西に於て。故無くして二千里の封土を蹙むるものなり。且つ內川に航行することは。從來各國が我に向て之を歷求するも我敢て之を許さざる所なり。然るを一たび俄人に許さば。他の列國も亦尤に倣ふて踵き至らんこと必せり。是れ許す可からざるの第二なり。

一朝廷稅課を爭はずして商人を惠恤す。若し準噶爾部及び回部並に蒙古各部を開きて。之を俄人の通商に任せ而も其輸入出稅を免除せば。我中國の商民は爲に日に困弊するのみならず。從來積弱貧困の蒙古各部をして。徒らに俄國の餌と爲らしめ。而かも新疆巨万の軍餉費用をして。徒らに俄人の爲めに消糜せられしめんとす。且張家口等の處內地到る處に俄人の商店を開設せしめ。漸次之を增設せしむる時は。爲めに彼れ不軌の戎心を開かしめ。万里の內首尾連絡して變亂の端を長せしめむとす。是れ許す可からざる第三なり。

一中國の藩屏は全く內外蒙古に在り。沙漠万里是れ天の以て俄人の限る所にして。卽ち彼犯侵せんと欲するも。北西一面

運送の途極めて難し。然るに今彼を許して內外蒙古內地に出入居留自由ならしめは。彼は重利を以て蒙古に啗はしめ。一且事ある時は交通便益にして。運粮も亦た意の如くならん。彼れ我か藩屬を煽動して其先驅たらしめんこと必せり。是れ許すへからさるの第四なり。

一新約第十四條によれは。俄人を許して卡倫三十六を自由に通せしめんとす。是れ其出入區域の太た曠く。無事の日に於ては。彼の商人來往するもの之を監視するの煩に勝へす。事ありて敵來れば之を禦くゝ太た難し。是れ許す可からさるの第五なり。

一各外國の商賈たるもの。軍器を帶して內地に出入するの例なし。今故無くして俄人。人每に一銃を携帶することを許さ

んとす。其意何くにかある。若し彼れ千百群をなして闖然として出入せは。是れ兵乎是商乎誰か能く之を辨せんや。是れ許すへからさるの第六也。

一俄人我と通商するの際。種々巧に課稅を免かる。今其免稅の例たる。各國も又均しく之に霑はむことを要求せは。我國關稅は之か爲めに每歲數百萬減屈せむとするや必せり。是れ許すへからさる第七也。

一同治三年(千八百六十四年)新疆所定の國界なる者は。以て我南北交通の要路を侵斷すへきものなり。新疆形勢其北路は荒涼にして南方は富庶なり。然るに今新約は瘠土を爭ふて膏腴を彼に棄與せむとす。虛名を務めて實禍を受くる拙是より甚しきはなし。是れ許すへからさる第八也。

一伊犁、塔爾巴哈台、科布多、烏里雅蘇台。喀什噶爾、烏魯木齊、古城、吐魯蕃、哈密、嘉峪關等の處に於て。俄國領事館の設置を准許するは。是れ西域全疆を擧けて盡く彼控制に歸せしむるなり。洋官あれば則斯ち洋商あり。洋商あれは斯に洋兵あり。初めは則ち我か權勢を奪ひ。繼ては前客を變して主となし。以て我蒙古人民を馴らして彼に服せしむ。彼には官ありて而かも我に官無く。彼は兵ありて而かも我は兵なし。其の危險なること如何そや。且つ我か境内の地。俄人の領事を置くことを許さは。各外國亦將さに例を援き。十八省の各服心の地遍く洋官を設くるに至らむとす。是れ其許すへからさる第九也。

一新約を以て之を我に還さんと云ふ所の伊犁なるものは。其

三面皆山嶺に圍まる。而も其卡倫於外に在る要地は。俄人之に盤踞すること故の如く。高きに據り以て卑きに臨む險要全く彼の手に在り矣。ホルカス河以西コルマン以北の地我れ之を得るも開拓するの地區無きなり。牧畜す可きの所なきなり。是れ地利絶へて無し矣金項寺は久しく俄人の市廛たり。現に之を俄人に與ふ產業便ならす。是れ伊犁一綫東方に往來するの路は。必ず俄人の巢窟を經由せさるを得ず。我か出路豫め既に塞がれり矣。而かも寥々たる遺民も亦彼は之を遷して去り人民空し矣。二百八十万兩有用の財を擲ちて。以て我國險要なく地利なく人民なく出路なきの伊犁を索むるも。將た安んぞ之を用ひんや。是れ其許す可からさるの第十なり。

吾人は斯の如き定約の擯斥せられたるを怪まずして寧ろ斯の如き定約の提出せらたるを怪む若し此定約にして當時滿朝の反對なくして實行せらるゝに至りしならば恐くは清朝は既に今日あるを得さりしならん然るに當時開戰の決心を以て此定約を拒む可しと慷慨上奏したる張之洞は今や伊犁西藏を露國に與へ又露國の要求する所は之れを許し以て其兵を借て馬關定約を廢紙に歸せしむ可しと言へるを以て之を觀るときは今後若し必要の場合に逼るときは伊犁定約を締結する彼に於て何かあらんや是を以て之を觀れは清國の前途は惴々として薄氷を履むか如きものあり

況んや露國か黑龍江左岸の地數百里を蠶食したるは清國か忘れざる所なり露國か清國を覬覦する一日に非ざるは又清國か

知る所なり清國の大敵は英國にあらずして露國にありとは清國近世卓識の士林則徐か初めて看破したる所にして今日清國上下の士民其卓見を稱する所なり而して日清戰爭に際して露國に密使を遣し其の援を乞ひ又我國に拂ふ可き償金を募るに露國の保證を乞へり是れ宋か元と講和して金を亡ぼし而して遂に元の爲に亡ぼされたるものと相似るの感なきを得んや之に反して露國か清國に對するの征略は或は勢を以て之を威嚇し或は恩を以て之を籠絡し虛に乘し弱を衝き志の遠大にして謀の周密なるは金元兩朝の比にあらず若し勢力の大小强弱を以て之を論すれは露國今日兵力の强大軍備の完備兵馬の精銳を以て今日清朝に對する恐くは三百年前今の清朝か滿洲八旗二十四万を以て明朝に對したるの比に非さる可し又金か宋に

對したるの比に非らざる可し。

清露兩國の關係ある斯の如し。吾人は既往に徵し往來に察して。露國が他日清國を併呑するは。決して想像に止まらざるを知るなり。獨り之を征服することを得るも。果して之を統治することを得るや之れ一個の大問題なり。而して此問題は吾人が支那數千年間歷史研究の結果を以て之れか解釋を試みんとするものなり。

今日の露國と昔日の遼、金、元が支那帝國に對するの關係に於て同一視す可らざるは。(第一)遼、金、元は支那國民より劣等人種にして。露國は今日文化の或る點に於ては支那國民より優等なるにあり。(第二)遼、金、元は其支那に來て國家建設すると同時に。自己の舊國民を解散したるも。露國は支那を征服したりとするも。決して之が爲に其舊國家を解散せざる可きにあり。是れ遼、金、元、清、支那を征服したると。露國が將來に於て支那を征服するとは同一なる可きも。其統治するに於ては大に異なる所以なり。露國は歐州に於てこそ。其文化進歩の程度は英、佛、獨の下にある可きも。東洋各國に對しては。歐洲文明の代表者を以て自ら居るものなり。況んや露國が歐洲に於ても。一は其スラフ人種たるの故を以て。一は其の居る所の土地形勢を以て。常に歐洲の文化を既に腐敗せり。自己は是れ新文明の繼續者なりとの意志を抱き。又亞細亞に向ては廣漠たる邦土を開て文化の民となし。東洋人民に希臘教を輸入し。西洋の文明を輸入するを以て自己の天職なりと信じ。彼のペートル大帝以來此の國是を奉し。今日に至るまで採て動かさるは。是れ世人か知る所なり。

然れとも今日に於て露國か他の歐洲列國に異なりとする一國の國是なる者は唯希臘教と君主專治とに外ならす然るに希臘教なる者全國多數の人民か遵奉する所に相違なしと雖凡そ歐洲列國の大勢として智識あり經驗あるものか日に怪疑不信の風潮に吹廻さるゝは始んと十九世紀の大勢とも言ふへきものにして此不信の風は將來に向て益々勢力を增長すへし而して露國の教育あり智識ある社會の如きは或は佛の「ボルテル」「ルーソーの系統を受け或は獨のショッペンハワーレンハルトマンの哲學に心醉し宗教不信の風は却て他の列國よりも甚しきものあり又是れ君主專治の如きも今日は其基礎尙ほ依然として動かさるも民主的の風は漸く一國の中等社會に侵入し彼れ君主專治には根本的より反對すと云ふ虛無黨か隱然として社會の

裏面に勢力を有するを見ても露國の君主專治は將來益々安全を保つこと能はさるを知るへし然らは今日の露國は政治宗教の點に於ては他の歐洲列國と異なる所あるを見す而して露國か獨り他に異なる所のものはスラブ民族を以て此大帝國を建設すと云ふにあり此思想こそ露國帝國の基礎をして强固ならしむるの勢力ありと云ふべし

抑も露人か自らスラフ人種を以て一種特別の天職を有する人種の如く自から感覺し居るは漢族か自から中華中國を以て許すに何れか又露國の希臘教か國民に勢力を有するは儒教か支那國民に勢力を有するに孰爲れか夫れ露國は自からスラブ人種と云ふ特別の人種を以て自ら居ると雖も羅甸民族チウトニック民族か文化の發達は既に其絕頂に達し恰も老人の如く吾

々スラブ民族は將に發達せんとする少年の如く。前途無限の多望を有すると云ふに過きず。此感覺は露國々家の發達上には大勢力を働きつゝあるには相違なし。然れども露國か歐洲の後進國を以て自ら居り。或は嘗て佛國に模倣し。或は嘗て獨逸に傾向したるは。支那國民か數十年間依然として夷狄に制服せられたるにも係らず。中華中國の民を以て自ら信するの厚きに如かさるなり。

故に國家的勢力を評すれは。支那帝國は素より露國に及はす。今日の支那は恰も昔日宋朝の如き狀躰に陷れり。而して露國か北方より支那に對し。陰に陽に政略と兵力とを以て南下の勢を計るは恰も金元兩朝か宋に對したるか如し。而して他日果して支那を征服するの機會ありとせんに。露國か支那を統治するの政

略は如何に出つるや。政府を以て支那を統治するは極めて容易なるへし。乃ち金元兩朝の如きは今日の露國よりも不完全なる軍備を以て。不充分なる兵力を以て支那を統一したるにあらずや。況んや露國今日の兵力を以て支那を統治するは難きに非す。而れとも露國は國民として支那を同化せんとするに至りては。吾人其萬々能はさるを知るなり。

且つ夫れ金元兩朝は外敵を以て支那を制限したるも。之れを統治して數百年間の勢力を保ちたると。制度文物風俗習慣一切を變して漢俗となり。其人種は漢人となり。充分支那に同化せられて然る後に之れを統治することを得たるに非すや。然るに今日の露國は支那を征服するとするも。決して支那を統治せんか爲に希臘教を棄て。其歐洲文明を棄て。支那に同化せらるゝものに

非さる可し。

然らは乃ち露國は支那を同化して露國人民たらしめんか。之れ又能はさる所なり。乃ち露國をして支那たらしむること能はす。支那をして露國たらしむること能はされは。兵力を以て一時支那を征服するも。露國は永く露國。支那は永く支那として殘るへし。而して露國か支那を統治するの一法は。唯三億七千万の支那國民を以て。露國臣民と云ふたるの下に置き。其兵權、稅權を以て露國の國家に統屬せしむるに過きす。而して一切の官吏は支那人を任用すること猶元朝、金朝の如くならさるを得す。之れ乃ち僅に支那を征服するの名義ありて。之れを露國々民たらしむること能はさる可し。

然れとも試に思へ。七十二万方里の面積、四億万の人口而して其富力は遙に露國に倍するの。支那帝國を自己に服屬するに及んては。露帝國中央集權は果して何れに在るへき乎。今日の英國か本國に在りて。遙かに印度を統治するか如きは恐くは同例にあらす。而して若し中央集權を以て支那に移すとするときは。露國の中心は歐羅巴より亞細亞に移るなり。若し露國の權を平等に兩分し分ちて支那を以て東部帝國とし。今日の露國を以て西部帝國とし。而して露國皇帝之れを統治するか如きことあらは。之れ一國を兩分して二國となさざるを得ざるなり。

第十章　現時我邦に於ける漢文學の研究法を一變すべし

我か帝國は現在及ひ將來に於て。支邦に對しては大に爲すべきの職分と利益を有せり。大に爲さんと欲するものは先つ大に知

らざる可らず。知らざれは爲す能はず。蓋し智識は勢力なり。而して世界列國中我か邦人の如く支那を善く知るの手段を有するものはあらず。卽ち今日に於ても我邦敎育の一部として研究しつゝある支那文學は。支那の既往と現在とを知るには。最好方便なるの故を以てなり。

然るに如何せん我邦に於て從來支那を知るものは。未た漢文學者の如く粗謬なるものはあらざるなり。是れ其故何ぞと言ふに畢竟研究の方法其宜を失するか爲めのみ。然らは。從來漢文學者か支那研究の缺點は焉くに在るやと言ふに。吾人は坐ろに彼の佛國テイン氏が英國文學史の發端に於て論說したる所の旨趣を憶ひ起さすんばあらす。卽ち之を一言すれは。漢文學者は支那文學を知るも之れか產出者たる支那人を知らす。又一個の支那人を知るも國民としての支那人を知らす。是れ皆着眼の點を謬るが爲めのみ。

故に吾人は今後の漢文學者に向て。支那文學を研究するの原則を左の如く改正せんと欲するなり。

第一後來の漢文學者は支那の個人を知りて國民を知らざるなり。故に今後は國民を知ることに注意すべし。例へは漢文學者は孔子の何人たるやは之を知るも。孔子が卓絕圓滿なる賢人として代表する支那國人の特性に至りては。恐らくは之を知らざるなり。朱子が如何なる思想を懷抱したるやは之を知るも。朱子が博大精緻なる思想家として代表する。支那國民の思想に至りては恐くは之を知ざるなり。此の如く個人の品性と思想とを知るは。其人物を崇拜し。其敎義を尊信するに於ては必要なりと雖も。